

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第145集

坊館跡発掘調査報告書

第三北上中部工業用水道関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

坊館跡発掘調査報告書

第三北上中部工業用水道施設関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,300箇所及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、工業の振興による拠点的な開発を目指した内陸型工業地帯を形成することは、雇用機会の拡大と県民所得の向上を図るうえで重要な施策であります。本県最大の平野部である北上中部地区は高速交通網の整備等立地条件の優位性から北上工業団地が形成され、立地企業の大幅な事業拡張が見込まれることから工業用水の確保も緊急を要するところであります。

このような埋蔵文化財の保護と開発との調和ある施策も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団では埋蔵文化財センターの創立以来岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

第三北上中部工業用水道事業に関連する二子城坊館跡は、北上市街地北方の北上川右岸に立地し、昭和63年の発掘調査によって縄文時代の遺構と遺物が発見され、貴重な資料を提供することができました。

本報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御協力、御援助を賜りました岩手県企業局、北上市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成元年9月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 中 村 直

例 言

1. 本報告書は、岩手県北上市二子町字坊館 19-1 ほかに所在する二子城坊館跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、岩手県企業局による第三北上中部工業用水道施設建設に伴って遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的に実施した緊急発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会と岩手県企業局との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施したものである。
3. 遺跡の調査略号は BD-88 である。また、岩手県教育委員会遺跡台帳の登録番号は、ME 46-2214 である。
4. 発掘調査面積は、1,360 m²、野外調査期間は昭和 63 年 10 月 4 日～11 月 12 日である。
5. 野外調査は工藤利幸・佐瀬隆、報告書の作成は工藤利幸が担当した。
6. 本報告書に掲載した実測図の凡例については“III. 調査経過および調査方法”に掲載している。
7. 石器、石製品の岩質同定は、佐藤二郎氏（佐藤地質工学研究所）に依頼した。
8. 調査に際して次の機関、諸氏から御指導、御協力をいただいた。（敬称略）
北上市教育委員会、北上市水道局、岩手県企業局北上工業用水道事務所、(株)水質研究所北上工業団地終末処理場、斎藤尚己、沼山源喜治、本堂寿一、稲野裕介、佐藤恒男、浅田知世。
9. 調査に関わる諸記録・遺物等の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

序
例言

〈本文目次〉

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の位置・環境	1
1. 遺跡の位置と歴史環境（概観）	1
2. 地形・地質概観	2
III 調査経過および調査方法	5
1. 調査の経過	5
2. 調査区の割付	5
3. 調査方法と遺構の名称	6
4. 実測図版の表現について	6
5. 土層について	7
IV 遺構について	11
1. 遺構の分布概要	11
2. 住居址・炉・焼土	11
3. 陥し穴状遺構と土坑	20
4. 建物跡様の配列を示す土坑群	24
V 遺物について	26
1. 土器・土製品	26
2. 石器・石製品	28
3. 金属製遺物	33
VI まとめ	33
表1. 土坑規模一覧	24
表2. 土坑間距離計測表	26
表3. 掲載石器計測表	31～32

〈図版目次〉

<p>図版 1 坊館跡位置図…………… 2</p> <p>図版 2 礫石器凡例…………… 6</p> <p>図版 3 土層断面図…………… 8</p> <p>図版 4 遺構配置図…………… 9</p> <p>図版 5 GIV-01 住居址と出土遺物(1)……………12</p> <p>図版 6 GIV-01 住居址出土遺物(2)……………13</p> <p>図版 7 GIV-02 住居址……………15</p> <p>図版 8 GIV-02 住居址出土遺物……………16</p> <p>図版 9 GIII区土器埋設炉……………18</p> <p>図版 10 FIV-0区焼土……………19</p> <p>図版 11 DI-001 陥し穴状遺構……………20</p> <p>図版 12 DI-002 陥し穴状遺構……………21</p>	<p>図版 13 FIII-023 土坑……………21</p> <p>図版 14 FIV-029 土坑……………22</p> <p>図版 15 FIV-004 土坑……………22</p> <p>図版 16 GIV-006 土坑……………23</p> <p>図版 17 建物様配列の土坑群……………25</p> <p>図版 18 土器・土製品・鉄製品……………29</p> <p>図版 19 石器 (1)……………34</p> <p>図版 20 石器 (2)……………35</p> <p>図版 21 石器 (3)……………36</p> <p>図版 22 石器 (4)……………37</p> <p>図版 23 石器 (5)……………38</p>
--	--

〈写真図版目次〉

<p>写真図版 1 調査区域近景(1)……………39</p> <p> 〃 2 調査区域近景(2)……………40</p> <p> 〃 3 土層堆積の状態……………41</p> <p> 〃 4 GIV-01 居住址……………42</p> <p> 〃 5 GIV-02 居住址……………43</p> <p> 〃 6 GIII区土器埋設炉と周辺状況……………44</p> <p> 〃 7 土坑等の確認状態……………45</p> <p> 〃 8 陥し穴状遺構……………46</p> <p> 1. DI-001 陥し穴状遺構全景</p> <p> 2. DI-001 陥し穴状遺構埋土</p> <p> 3. DI-002 陥し穴状遺構全景</p> <p> 4. DI-002 陥し穴状遺構埋土</p>	<p>写真図版 9 土坑の分布配列状態……………47</p> <p> 〃 10 土坑埋土の状態等……………48</p> <p> 1. BI-001 土坑 2. FIV-003 土坑</p> <p> 3. FIV-009 土坑 4. FIV-016 土坑</p> <p> 5. FIV-029 土坑 6. GIII-006 土坑</p> <p>写真図版 11 GIV-01 住居址出土遺物……………49</p> <p> 〃 12 GIV-02 住居址出土遺物……………50</p> <p> 〃 13 遺構外出土器(1)……………51</p> <p> 〃 14 遺構外出土器(2)他……………52</p> <p> 〃 15 石器 (1)……………53</p> <p> 〃 16 石器 (2)……………54</p> <p> 〃 17 石器 (3)……………55</p>
--	---

I 調査に至る経過

第三北上中部工業用水道事業は、北上工業団地の立地済企業における工業用水の需要拡大と今後の立地企業に対する工業用水の確保のため、昭和 61 年から平成 11 年にかけて工業用水道施設の建設を行う事業である。

工業用水道建設用地及び周辺には二子城跡とこれに関連する加賀館跡、坊館跡、監物館跡等の周知の遺跡があり、これにかかわる取扱いについては岩手県企業局と岩手県教育委員会との間で協議された。昭和 62 年 12 月 18 日付で県企業局から調査の依頼をうけた県教育委員会文化課は、同年 12 月 22 日に現地確認を実施し、坊館跡にかかる用地内全域の発掘調査を実施する必要がある旨回答した。この後、さらに両者間で協議が重ねられ、県教育委員会文化課は調整のうえ昭和 63 年度における岩手県文化振興事業団埋蔵文化センターの発掘調査事業に組み入れることとした。

これにより、当埋蔵文化財センターは昭和 63 年 9 月 6 日付け委託契約によって発掘調査に着手することとなったものである。

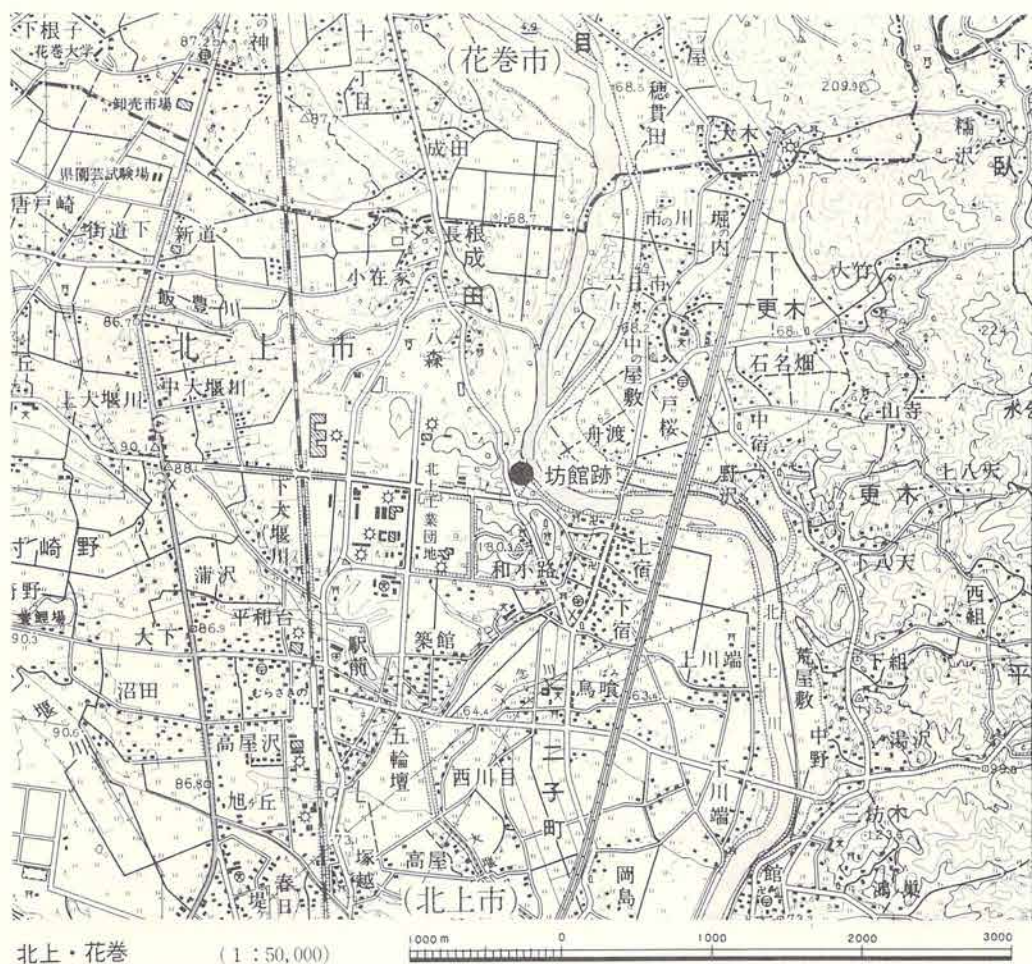
II 遺跡の位置・環境

1. 遺跡の位置と、歴史環境（概観）

二子城跡の一部をなす坊館跡は、東日本旅客鉄道東北本線村崎野駅の北東約 2 km に、また北上駅の北北東 6.2 km に位置し、北上川右岸に沿った標高 73.0～80.0 m の河岸段丘に立地しており、その前面は断崖眺望の良好な場所である。国土地理院発行 5 万分の 1 地形図「北上」NJ-54-14-13(一関 13) 図幅中の北緯 39 度 19 分 57 秒、東経 141 度 18 分 22 秒付近に位置する。

調査対象区域は標高 73.0～80.0 m の範囲にあり、東側を流れる北上川との比高は 13～20 m である。現況はほとんど山林であるが一部荒地となった畑地も存在する。調査対象区域は取水場建設区域と導水管埋設区域とに分かれている。取水場建設区域の標高は標高 73.0～78.5 m の範囲にあり、更に地形的状況から 73.0～77.0 m の斜面区域と 77.0～78.5 m の比較的平坦な区域とに区分される。導水管埋設区域は 79.5～80.0 m の範囲にあるが、DI 区・EI 区が高く西方の B 区に向かって次第に下っており、若干起伏が見られる。

坊館跡の南東側には、北上川に合流する小沢を挟んで加賀館跡があり、西側には自然地形と人工的堀とによって区画された監物館跡、物見ヶ崎遺跡（館跡？）が、そして南には飛勢森館跡が存在する。また眼下に臨む北上川の南東下流には、舟渡^{ふなど}渡しの船着場がある（註 1）。周辺には、特に高い山々は見られないが、西側に隣接して物見ヶ崎（120 m）、南 500 m 付近には飛



図版1：坊館跡位置図

勢森 (130.3 m) があり、北上川を挟んだ東側には北上山地西縁の山々が連なっている。

遺跡周辺からは、縄文時代の土器、石器、平安時代の土師器、須恵器の破片などが採集され、また中世の和賀地方を支配した和賀氏の居城「二子城跡」であることなどから、各時代にわたる複合遺跡として古くから注目されている。北上市教育委員会によって昭和50年には加賀館跡の一部が、昭和52年には今回の調査区域北西側に隣接する坊館跡の一部が調査されている(註2)。また昭和60年には加賀館跡の試掘調査が行われている(註3)。

2. 地形・地質概観

盛岡市・花巻市を経て北上市内に入った北上川は概ね南流しているが、遺跡前面でその流れ

を東に変え、ほどなく南流する。遺跡周辺の北上川右岸には、河岸低地と広大な段丘群が発達している。段丘群の主要なものとしては、古期から西根段丘、村崎野段丘、金ヶ崎段丘があり、中川久夫他(1962)による段丘区分によれば坊館跡が立地する段丘は村崎野段丘である(註4)。また前述の二子城跡の一部をなす飛勢森・物見ヶ崎は、この村崎野段丘上に突出する残丘で、その山体は稲瀬安山岩と呼ばれる第三系の安山岩および安山岩質凝灰角礫岩～凝灰岩から成っている。

村崎野段丘の段丘構成層および同段丘面を被覆する火山灰等については、『村崎野段丘は、最も緩傾斜で比較的新鮮な面を保ち、特徴的な火山灰層におおわれる。構成層は砂および粘土を基質とする礫層で、厚さ10数mにおよび、各所で植物質薄層をはさんでいる。この礫層を、北上市飯豊付近を模式地として飯豊礫層と呼ぶ(65)。飯豊礫層の最上部は、多くの地点で礫が疎となり、粘土ないし砂まじりの粘土のみとなる。その上位には整合的に黒沢尻火山灰(模式地：北上市黒沢尻)(69)がのるが、火山灰直下の部分は一般に暗茶褐色を呈している。豊沢川・和賀川間の村崎野段丘上に突出する飯豊森・飛勢森は、第三系に属す安山岩および同質凝灰角礫岩・凝灰岩(稲瀬安山岩)より成る残丘である。

黒沢尻火山灰は花巻南方から前沢南方まで分布するが、北上川沿いの地域では黒沢尻～大堰川^{せき}付近で最も厚く250～300cmに達する。この付近の黒沢尻火山灰主部は黄灰色粗粒浮石で上方に茶褐色火山灰をとまう。この浮石は、村崎野付近を模式地として村崎野浮石と呼ぶ(68)。

村崎野浮石は南方からしだいに厚さを増し、相去町で140cm、黒沢尻で170cm、大堰川で180cmとなるが、その北方山神付近で急に薄失してしまう。

南方では六原付近で厚さ60cmとなるが、このあたりから浮石層下底に青～青黒色砂質火山灰が集中する。胆沢川北岸平林付近では厚さ100cm余となり、下底から20cmをへだてて数cmの暗緑色砂状火山灰層をはさむようになる。

西方の夏油川流域ではさらに若い礫層下にこの浮石層が埋没しているが、ここでは浮石層の層厚は460cmに達し、上下層に細分される。火山灰の重鉍物分析結果では、夏油川流域におけるこの浮石層下半は北上市付近のものに、上半は平林付近のものにそれぞれ類似する。層厚変化状態を併せ考えると、さらに研究が進めば、村崎野浮石は分布の異なる2層の浮石に区分される可能性が強い。』(中川久夫他1963年から抜粋)

上述の村崎野浮石の区分については、その後の吉田充・金原光男・大上和良(1980)、井上克弘・小沼敦(1981)、金原光男・吉田充・大上和良(1981)、大上和良・吉田充(1984)の研究調査により予察どおりに2分されている。しかし、2分された浮石層は研究者によって上下関係が反対の結果となっており、更に検証が必要であろう(註5)。

〈註および参考・引用文献〉

- 註 1：別称を“永明寺渡し”とも言い、北上川を挟んだ二子地区と更木地区とを結ぶ渡し場で、その創設年代は不明である。また中近世における北上川水運との関係も不明であるが、現在の黒沢尻・二子・更木を経て東和・土沢へ通じる交通路途中にあり、昭和4年、昭和橋架設によってその役目を終えている。
- 註 2：「二子城跡坊館遺跡報告書」北上市教育委員会 昭和52年
- 註 3：「北上市東岸遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ（口内地区）」北上市教育委員会 昭和61年
- 註 4：中川久夫・岩井淳一・大池昭二・小野寺信吾・森由紀子・木下尚・竹内貞子・石田琢二（1963）「北上川中流域沿岸の第四系および地形」地質学雑誌第69巻第812号
- 註 5：吉田充・金原光男・大上和良（1980）と井上克弘・小沼敦（1981）・金原光男・吉田充・大上和良（1981）を参照。
- ① 北上市教育委員会（1977）「二子城跡坊館遺跡調査報告書」北上市文化財調査報告書第21集
- ② （1983）「北上市史 第8巻近世（6）」
- ③ 北上市博物館（1983）「北上川の水運」北上川流域の自然と文化シリーズ（5）
- ④ 北上市教育委員会（1986）「北上川東岸遺跡群詳細分布調査報告書Ⅲ（口内地区）」北上市文化財調査報告書第43集
- ⑤ 岩手県教育委員会（1986）「岩手県中世城館分布調査報告書」岩手県文化財調査報告書第82集
- ⑥ 北上市立博物館（1987）「北上川の伝説」北上川流域の自然と文化シリーズ（9）
- ⑦ 吉田充・金原光男・大上和良（1980）「胆沢扇状地における火山灰層序について」日本地質学会第87年学術大会講演要旨
- ⑧ 金原光男・吉田充・大上和良（1981）「いわゆる“村崎野浮石”について」日本地質学会東北支部会報No.11
- ⑨ 大上和良・吉田充（1984）「北上川中流域・胆沢扇状地における火山灰層序」岩手大学工学部研究報告第37巻
- ⑩ 大上和良・町田端男・吉田充（1986）「岩手県 胆沢扇状地地域に分布する火山灰のフィッシュン：トラック年代」第四紀研究第24巻第4号
- ⑪ 井上克弘・小沼敦（1981）「北上川中流域における黒沢尻火山灰の層序、分布と強磁性鉱物の化学組成」第四紀研究第20巻第1号

III 調査経過および調査方法

1. 調査の経過

坊館跡に対する野外調査は、1988年10月4日(火)の調査事務所設営に始まり、同年11月12日(土)の器材等の撤収で終了している。調査は、まず伐採木の枝葉や雑草等の除去、刈払いとこれに平行して調査区割付のための測量を行った。

調査対象区域は取水場建設区域と導水管埋設区域とに大別される。面積上取水場建設区域が主体であるが、導水管埋設区域が細長いことや昭和52年の北上市教育委員会による調査区域が平行していることから、導水管埋設区域を調査区割付の基準とした。

その後、土層の堆積状態・遺物の包含状態・遺構確認面などを把握するため、数地点の試掘調査を行った。試掘の方法は、標高77~80mの比較的平坦な区域については調査区画の小単位に従ったが、標高73~77mの斜面区域についてはトレンチを設定して行った。試掘の結果、取水場建設区域には造成層および古い時期の耕作土層(基本土層I層)が広がっており、旧耕作土層等の直下には浅い小土坑が並ぶこと、そしてII層中に少量ながら縄文土器片・土師器片・石器等が包含されることが判明した。斜面区域ではI層とII層が厚く堆積しており、遺物はII層下部に包含されるが平坦区域と同様に少量である。また、斜面部の傾斜は現地形の傾斜度よりも急であったことが判明した。

これらの試掘成果から取水場区域にはパワーシャベルを導入し、造成層・耕作土層の除去を行い、斜面部ではII層までを除去し、その後人力によって遺構・遺物の分布確認を行った。導水管埋設区域は、既設導水管の保護や調査区域が狭いことから全て人力によって遺構の確認を行った。

10月末から11月には、降雨、降霜と天候が悪化し、小土坑の埋土断面は霜柱や雨水で崩壊されるものが続出し、調査条件が悪くなった。

2. 調査区の割付

調査区の割付測量は、新導水管埋設計画測量杭および既設導水管埋設区域杭との関係から遺構配置図に示した基準点1~3によって割付を行った。割付の方法は、20m×20m四方を大調査区画とし、大調査区は更に4m×4mの小調査区画によって25区画に細分した。大小調査区の名称は例)FIV-A、FV-B区、……の表記方法とし、配列については遺構配置図の割付を参照されたい。また基準点1~3の座標値は以下のとおりである。

〈基準点の平面直角座標値……第X系〉

基準点1、X=-74011.189 Y=26406.840 H=80.076

基準点 2. X = -74064.886 Y = 26433.511 H = 77.676

基準点 3. X = -74037.852 Y = 26353.116 H = 79.834

以上の基準測量結果は、3級基準点測量基準によって測量業者に依頼して得た成果である。

3. 調査方法と遺構の名称

確認した遺構を大きく住居址、土坑類(陥し穴状遺構、小土坑等)、土器埋設炉、焼土遺構に大別し、各々の遺構には大調査区毎に通し番号を付与し、大調査区画名と通し番号の組み合わせで遺構名とした。なお通し番号は、住居址は2桁で、土坑類は3桁で示している。

精査の方法は、住居址については四分法を、土坑や陥し穴状遺構については二分法をとっている。

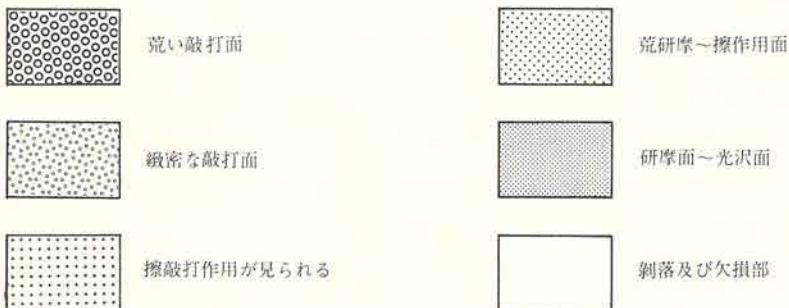
4. 実測図版の表現について

(1) 各図版の縮尺については、スケールまたは縮尺率を図版中に示している。

(2) 遺構実測図の表現例としては、床・壁の貼付部、強く変色した焼土、弱く変色した焼土、にスクリーン・トーンを用いている。

(3) 遺物実測図については、礫石器は図版に例示したスクリーン・トーンを用い、剥片石器については図示が困難な使用痕跡の範囲を「——」で、また素材・石器製作使用期と異なる極新期の剥離部を「——」で示した。また、剥片石器の自然面にはドットを落として加工面と区別している。土器の一部、土製品、鉄製品は欠損部(面)に右下がりのハンチングを加えている。その他表現例にないものについては個別の図版中で説明を加えている。

(4) 計測位置：遺物の計測位置・方法については、石器・石製品が図の配置位置で上下を長さ、左右を幅とし、各々の最大値を計測値とした。厚さについては最大部を計測している。



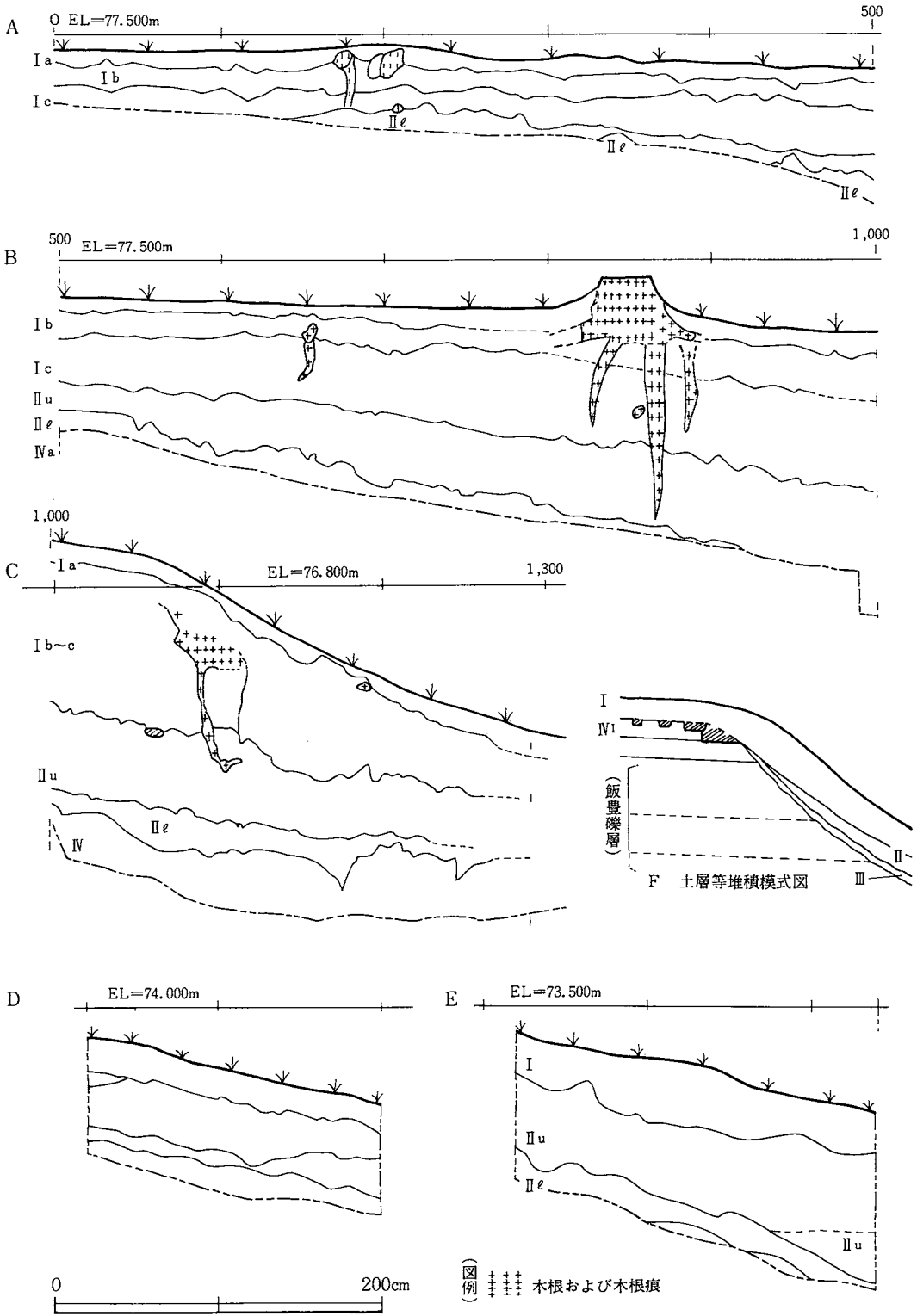
図版2：礫石器凡例

5. 土層について（図版3、写真図版3）

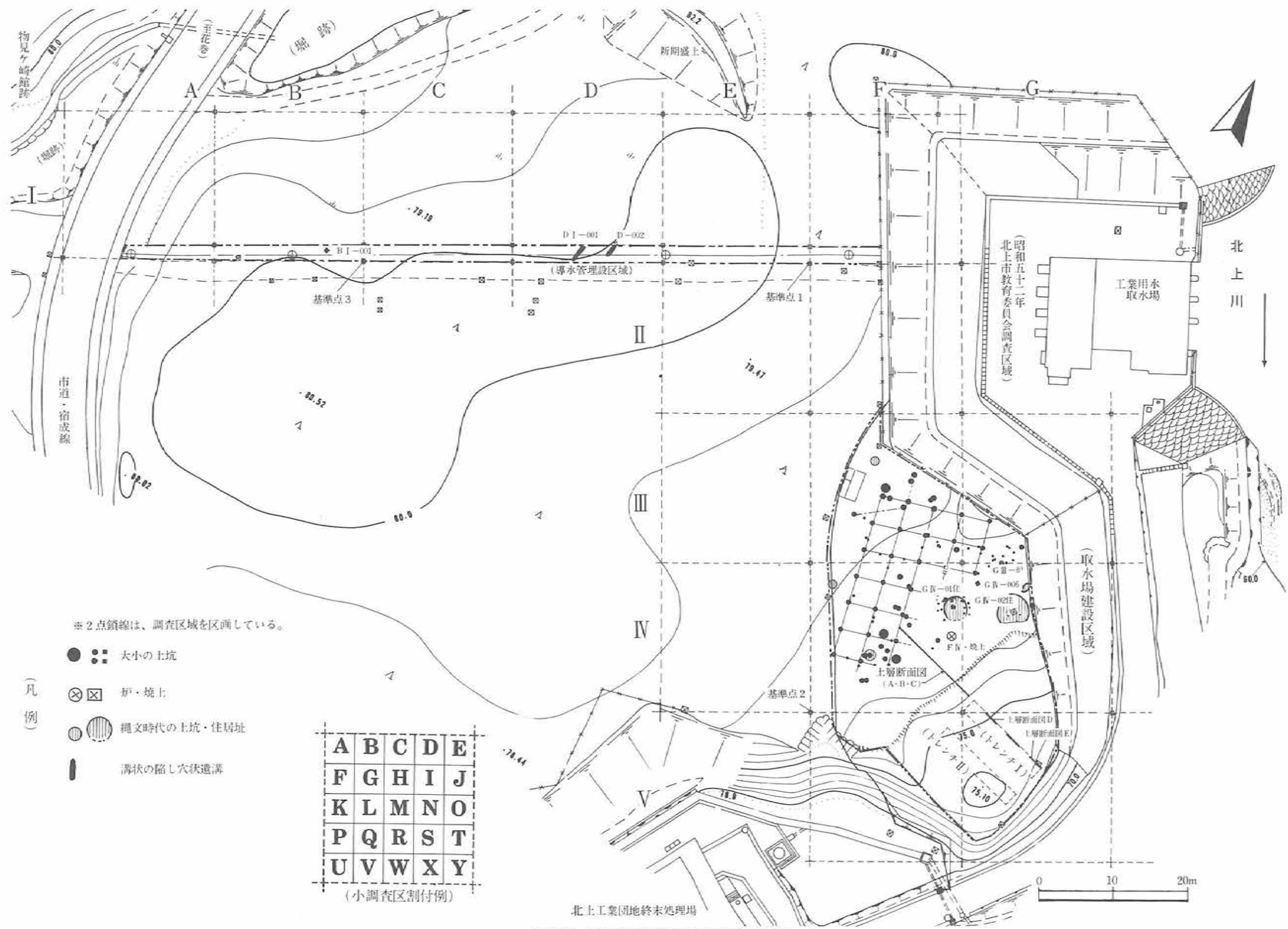
今回の調査区域内で確認できた堆積物の種類・状態は以下に述べるとおりである。本遺跡をのせる村崎野段丘に特徴的な堆積物として黒沢尻火山が挙げられるものの、浸蝕・流失作用を受けているため一次堆積層は確認できなかった。

〈土層の記録〉

- I層：本層は草木細根などに富む腐植質層、および人為作用が認められる層を一括した。
- I a：全体的に草木の細根、未分解植物質に富む黒褐色土層（10 YR 2.5/1）で、特に上部3 cm 前後は腐植の集積部である。締まり・粘性はなく、層厚は10～25 cm である。
- I b：緻密な黒褐色土層（10 YR 2.5/1）で、上・下位層よりも硬く締まっており、切断面では光沢も見られる。層厚は25～35 cm であるが、標高77 m 付近では50～60 cm である。また標高78.5～80 cm の範囲ではほとんど認められないが、認められる場合でも極うすいものである。
- I c：概ね10 YR 2.5/1の黒褐色土を呈するが、所々に黒色土や明黄褐色土・灰褐色土の小中ブロックが散見される。層厚は20～100 cm で、旧地形の斜面下方ほど厚くなる。
- II層：本層も地点によって若干の差異がみられ、上部をII u層、II l層に細分した。また、IV層直上に本層が堆積する地点ではII層とIV層との漸移層（II ll）も認められる。全体的な層厚は不定である。
- II u：埋没腐植土層の様相を呈する腐植土質黒色土層（10 YR 1/1）である。径50 mm 前後の円礫を少量含み、締まりは普通～やや軟らかい。粘性なし。分布はFIII・FIV区の一部、およびCI・DIの削平地点を除いた区域に見られる。層厚はFIV・FV・GIV・CV区の斜面を除けば5～20 cm である。上部から少量の土師器片が出土し、下部からII lの上部にかけて縄文土器片等が出土する。
- II l：斜面のトレンチ設定区域（GV区）周辺で見られた黒色土層（10 YR 1/1）で、径50 mm 前後の円礫を多く含む。II uに比べてやや緻密で、切断面にわずかな光沢が認められるが、粘性はない。層厚は0～30 cm である。上部に少量の縄文土器片等が含まれる。
- III層：黒沢尻火山灰の風化層、あるいはその2次層と見られる黄褐色土（10 YR 5/1）である。わずかに小～中粒の浮石を含む。取水場建設区域ではGIV・FIVに極うすく、かつ不規則に堆積しているが、導水管埋設区域では25～80 cm の厚さで堆積している。
- IV層：上部はにぶい黄橙色～明黄褐色（10 YR 7.5/1～6.5/1）で、下部へ移行するにつれて褐灰色～灰黄褐色（10 YR 5.5/1～4.5/1）あるいは灰白色（10 YR 7.5/1、6.5/1）などの粘質シルト～シルトへと変化し、下部では中礫以下の安山岩質の風化亜角礫に富み、地点によっては亜角礫間隙をシルトが埋めているような状態である。



図版3：土層断面図



図版4：調査区周辺の地形と遺構配置

以下は周辺の崖面等の観察から安山岩質亜角礫層から飯豊礫層へと移行するが、IV層以下の層厚については不明である。

IV 遺構について

今回の調査で確認・調査した遺構は、縄文時代の住居址2棟、土器埋設炉1基、焼土遺構1基、溝状を呈する陥し穴状遺構2基、土坑6基、縄文時代以降で近代初頭までの間と考えられる建物跡様の土坑55基、住居址に伴わない柱穴状の小土坑19基である。

1. 遺構分布の概要

調査対象区域は北上川に面し、全体的に北東～南東に開いた日当たりの良い河岸段丘上にある。確認した遺構のうち陥し穴状遺構2基と小型の方形土坑1基の計3基は導水管埋設区域に分布しているが、その他の遺構は全て北上川に面した取水場区域に分布している。

取水場区域では、住居址2棟・炉・焼土・楕円形土坑1基は、段丘縁に沿った平坦～緩斜面（旧地形）に分布し、建物跡様の配列を示す小土坑群とその他の土坑は住居址や炉などの西側に分布している。導水管埋設区域で確認した陥し穴状遺構2基はその長軸方向が並行する配置にあり、北上市教育委員会の調査事例と同じである。（図版4：遺構配置図参照）

2. 住居址・炉・焼土

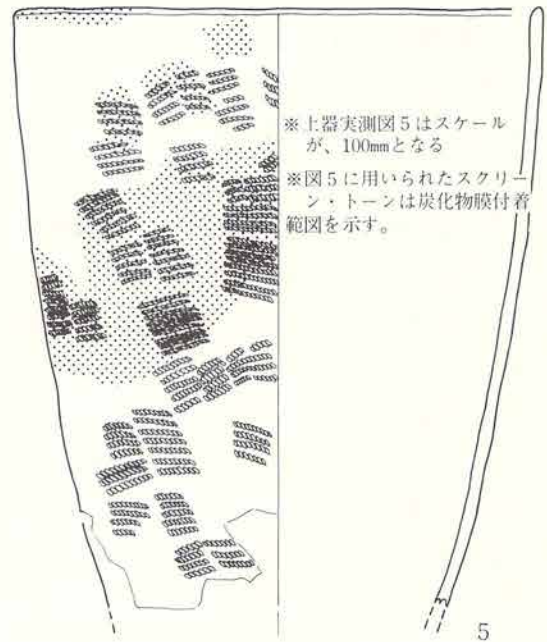
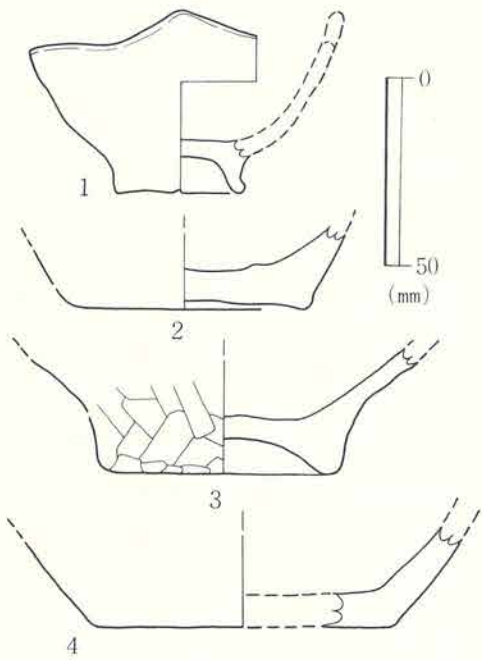
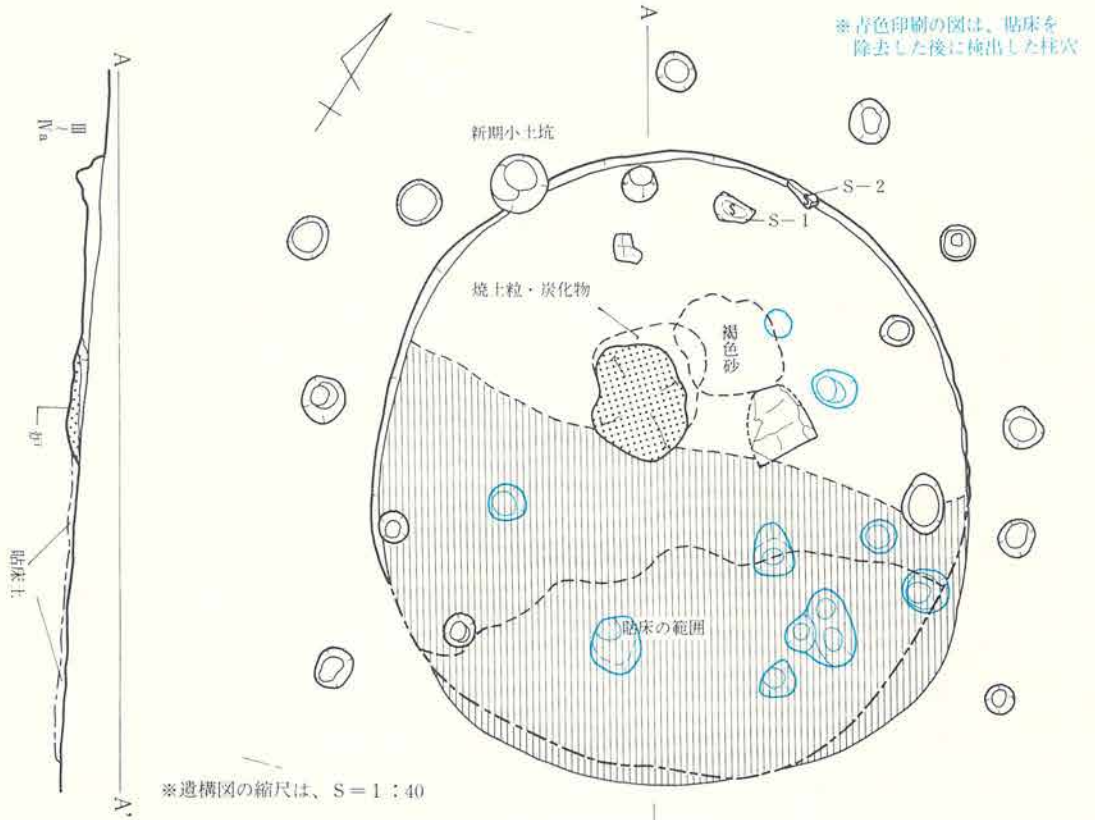
堅穴住居址、土器埋設炉、焼土遺構は、遺構の形態・出土遺物から何れも縄文時代に属するものである。しかし、出土遺物の種類・状態からは詳細な時期を決めるに困難がある。

(1) GIV-01 住居址 （図版5・6、写真図版4・11）

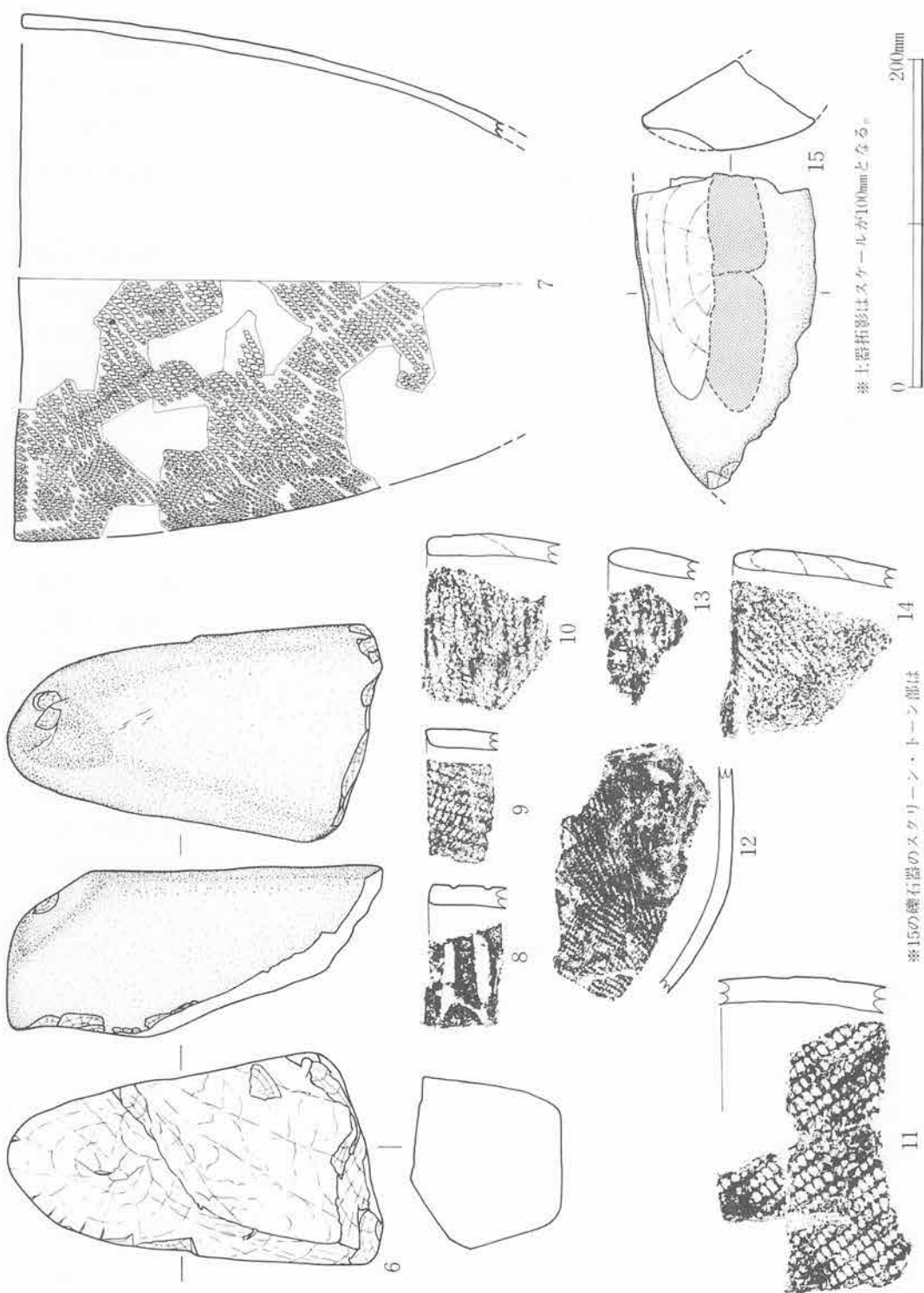
本居住址はFIV-J区からGIV-F区にわたって位置しており、その主体はFIV-J区にある。本来ならばFIV-01住居址とするべきものであるが、遺構確認の当初に命名した遺構名を修正せずに用いた。

確認状況はII層上面の抜根・清浄作業を進めたところ、図版5-1・5、6-7（写真図版11-1・2・6）の土器が出土し、さらに土器出土地点より下方では炭化物・褐色土粒が混じった暗褐色土が円弧状に分布しており、後に壁・床の貼付土であることが判明したので斜面上方のII層を数cm削平して、居住址の全体形を確認した。

壁の立ちあがりには、斜面上方側では明瞭であるが下方では確認できず、貼床、貼壁の範囲を居住址の範囲とした。平面形は、長軸上端336m、同下端328cm、短軸上端316cm、同下端310



図版5：G IV-01住居址と出土遺物(1)



※土器拓影はスケールが100mmとなる。

0 200mm

※15の礎石器のスクリーニング・トーン部は
摩滅光沢面の範囲を示す。

図版6：G IV-01住居址出土遺物(2)

cm の概ね円形を呈する。壁高は最大で 14 cm である。

床は、斜面上方がⅢ層中にあり、下方はⅢ層の上にやや砂質で炭化物粒・褐色土が混じった暗褐色土が貼り付けられている。また床面は斜面傾斜に沿った方向に傾斜しており、その勾配は 300 cm で 14 cm 下がる。柱穴と考えられる小穴は、床面で 5 穴、竪穴部外周で 10 穴検出しているが、それらの配置状態や規模からは柱穴と断定しがたいものも存在する。また貼床土除去後に 11 穴の小穴を検出したが、これらも柱穴とは断定しかねる（青色印刷）。

炉は、住居址中心からやや北西側（斜面上方）に偏った位置にあり、不整形で浅い掘り込みと焼土層が形成されているだけである。掘り込みと焼土の範囲は 58×50 cm で深さは 5 cm であり、周囲には礫はもとより埋設痕も確認できなかった。焼土層の周辺には、炭化物や種類不明の骨粉が少量散在している。特に図示した範囲には炭化物が多く認められた。その他、先に述べた焼土粒・炭化物の混在部に乗るように厚さ 6～7 cm の中砂質褐色砂が 50×55 cm の範囲に認められた。

埋土は斜面上方でしか確認できなかったが、Ⅱ層土に由来する黒色～黒褐色土で褐色土粒・炭化物を不規則に含んでおり、特に下部では炭化物・焼土粒が多い。

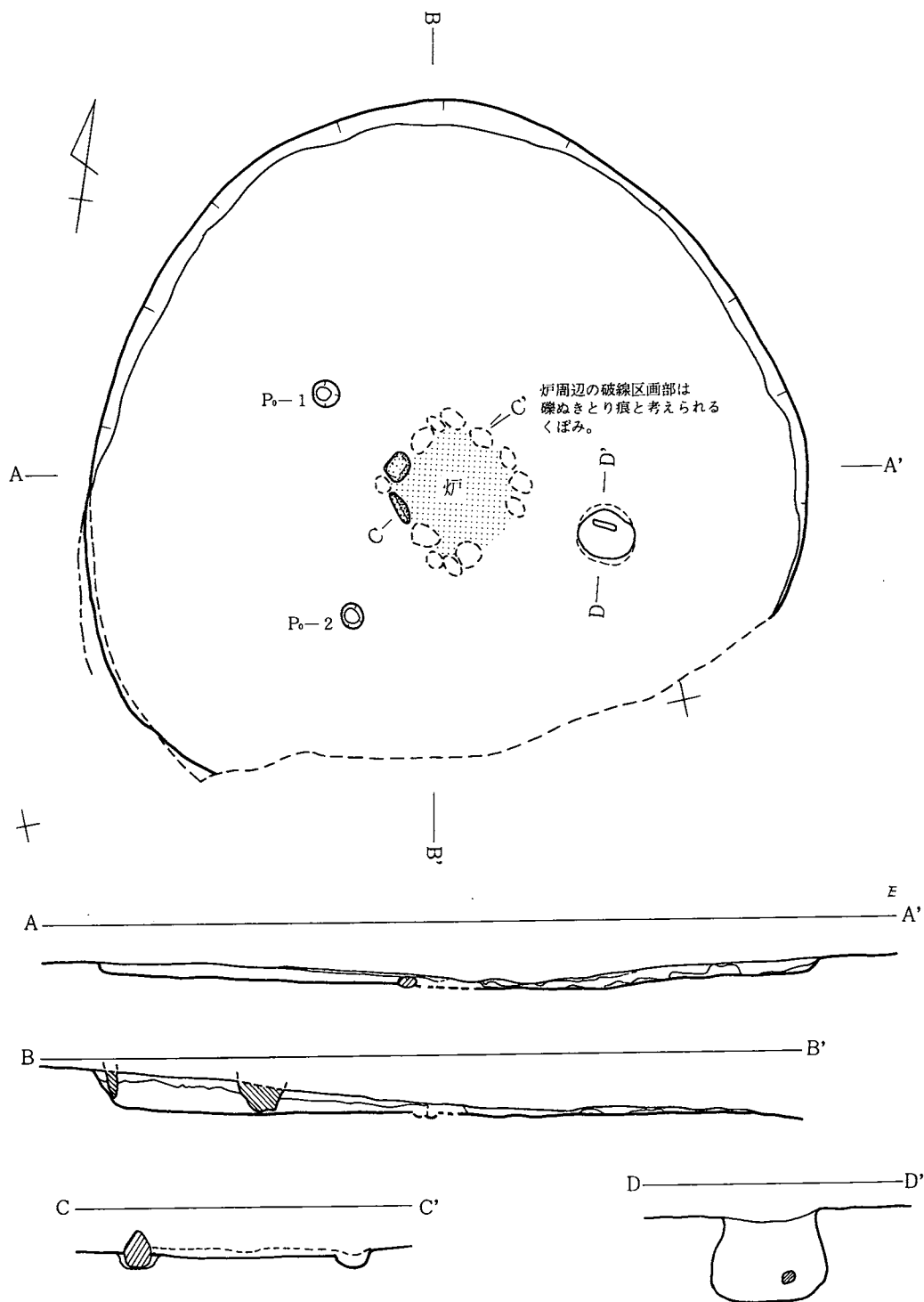
出土遺物としては、図版 5・6、写真図版 11-1～16 に示したものの他に、縄文だけの土器小片 10 余点、礫碎片数点がある。図版 5-5、同 6-7 の土器は床に接して同一地点から重なって出土しているが、何れも 2 分の 1 以下しか残っていない。他の土器は埋土および貼り付け土中からの出土で、住居址の時期を明確にしうる資料はない。なお、埋土から出土した土器片のうち数点は FIV-0 区焼土の上部から出土した土器と接合している。

石器としては図版 6-6・15（写真図版 11-10・13～16）が出土している。図版 6-6 は礫塊に 2 度の敲打剝離加工を施すことによって概略形を成形、その後図下端の鋭角部に刃部形成の調整加工を施している。図版 6-15 は、自然礫の曲面部に連続する 2 面の摩滅光沢面をもち、磨石あるいは台石と考えられるものであるが、破碎されているため本来の形状は不明である。図版 11-13 は擦石の碎片、同 14 は自然礫の分割片、同 16 は側面にわずかなペッキング痕をもつ礫である。石器の出土層位は床面、および床直上位である。

(2) GIV-02 住居址（図版 7・8、写真図版 5・12）

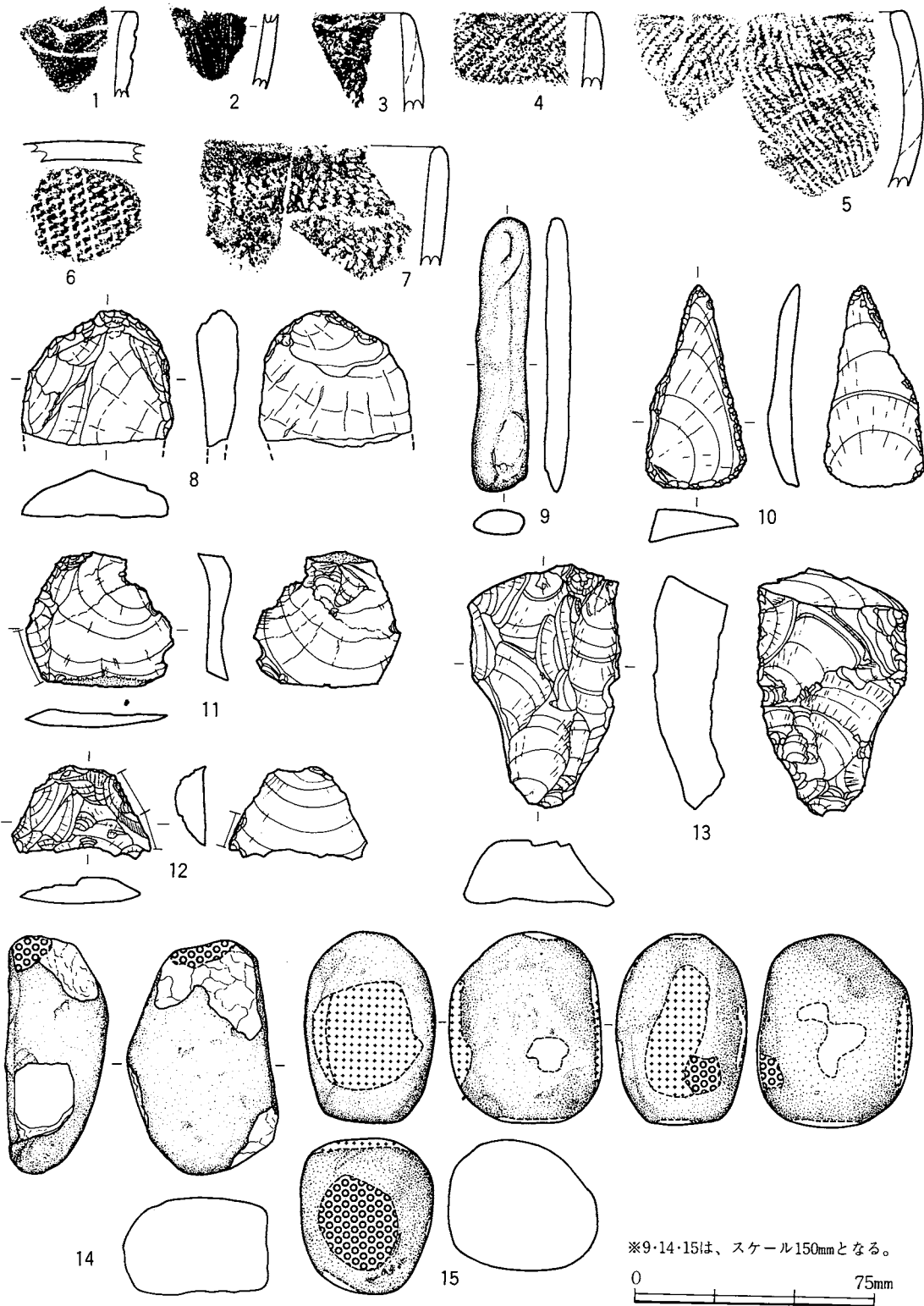
本住居址は、GIV-G 区と GIV-H 区とにわたって位置しており、その主体は GIV-G 区にある。確認状況は、Ⅲ層およびⅣ a 層上面でその一部を確認した。しかし南東～南々東の斜面下方では、Ⅱ 1 層・Ⅲ層中にも壁・床の形跡は認められず全体形を確認するには至らなかった。

平面形は確認した形状から不整な円形～楕円形と推定され、規模は斜面傾斜方向（北々西～南々東）の上端 390 cm・同下端 374 cm、直交方向の上端 434 cm・同下端 420 cm で、壁の最大



※平面図および断面図A~A'。B~B'の縮尺はS=1:40。C~C'、およびD~D'はS=1:20である。

図版7：G IV-02住居址



図版8：G IV-02住居址出土遺物

高は 21 cm であり、南西壁の一部には壁形成のための盛土および貼付土がなされていた。

床は全体的に緩やかな起伏が見られ、壁際が高く炉周辺が低くなっている。床には貼床の形跡が認められず、柱穴 2 穴、フラスコ状を呈する極小型の土坑 1 基を確認している。

炉は住居址のほぼ中心と考えられる位置にあり、2 個の自然礫と 11 の礫抜きとり穴が方形 (84×80 cm) に分布している。その内部には焼土粒・炭化物が混じった黒褐色～暗褐色の団粒構造土が 1～3 cm ほど堆積している。炉床部は極弱い熱変が認められるものの所謂焼土化と言えるほどの変化は認められない。

小型のフラスコ状土坑は、開口部径 33×26 cm、底面径 25×22 cm、最大膨らみ部の計 34×35 cm、深さ 26 cm である。埋土は開口部の崩壊土と考えられる灰白色～褐灰色のシルト状粘質土の小ブロックが黒色土中に混在する形で堆積していた。出土遺物としては図版 8-9 (写真図版 12-16・11) に示した棒状礫と石核が出土している。棒状礫は埋土中間から出土したもので片面には炭素吸着による変色が認められる。石核は底面から出土したものである。

柱穴は 2 穴しか確認できず、柱配置については不明である。規模は P₀-1 が開口部径 18 cm、底部径 8 cm、深さ 25 cm、P₀-2 が開口部径 16 cm、底部径 8 cm、深さ 12 cm である。

住居址全体の埋土は、部分的なレンズ状層やブロック混入を除けば 3 層に区分されている。しかし何れの層も住居址全体には分布していない。3 層の基本的な色調は黒色～黒褐色で、北東～南東側の床直上層は灰白色・黄褐色のシルト質土小ブロックを含み、上位の 3 層との間には極薄いレンズ状層や小ブロックが散見される。3 層は炭化物・焼土粒は極少量が散在する。

出土遺物としては図版 8 および写真図版 12 に示した資料の他に、擦石の碎方や縄文だけの土器片が 20 点余検出している。土器は埋土中からの出土で、直接住居址に関連する遺物とは考えにくい。図版 8-1 は、小波状の口縁突起をもつ口縁部破片で縄文地に三又状沈線文をもっている。同 8-2 は細い縄文 (LRI) をもつ破片、同 8-5 は条がやや異なる LRI の縄文が不定方向に施文されている。同 8-6 は底部破片で底面に網代痕をもつ。

石器は、搔器 (図版 8-10)、石核 (同 8-13)、器種不明の石器 (同 8-8)、使用痕跡と考えられる剝離の見られる剝片 (同 8-11・12)、擦石・敲石 (同 8-14・15)、炭素付着の見られる棒状礫 (同 8-9)、写真図版 12-8 の石棒・石剣類の破片、写真図版 12-9・15・17 の剝片や擦石破片が出土している。石器の多くはほぼ床面から出土しているが、図版 8-9・13 は小土坑内から出土している。また写真図版 12-8 は埋土の最上部から出土している。

(3) GIII-V 区土器埋設炉 (図版 9、写真図版 6)

本遺構は GIII-V 区と GIV-B 区とにわたって位置している。検出状況は、II 層下部から III 層へと遺構確認作業を進めたところ III 層中に炭化物・焼土粒・褐色土粒が不規則に散布する地点

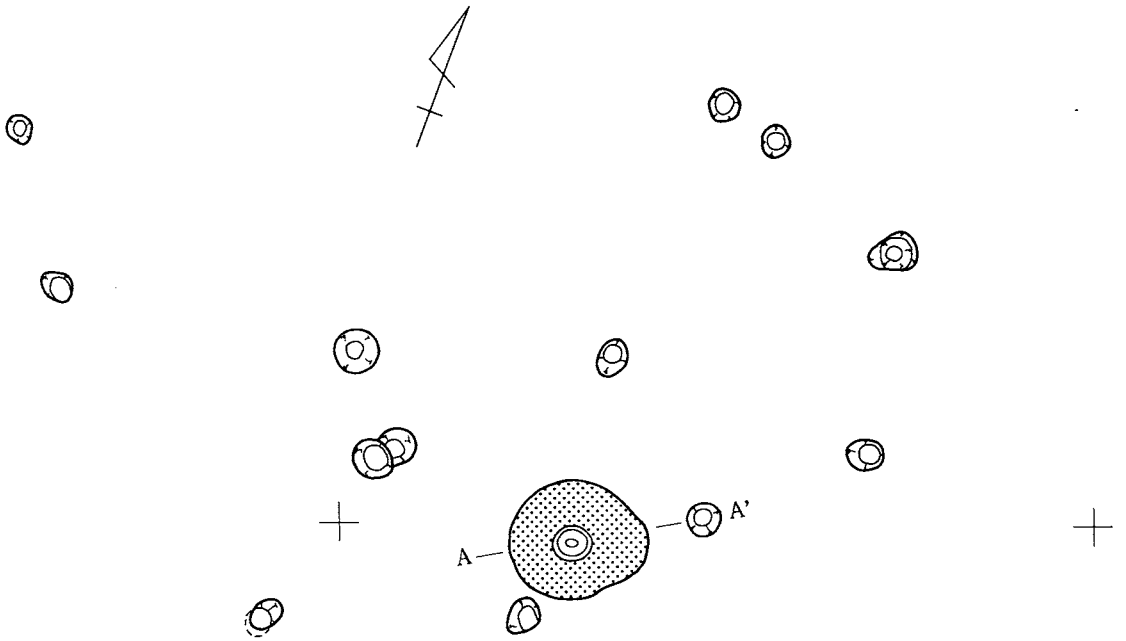
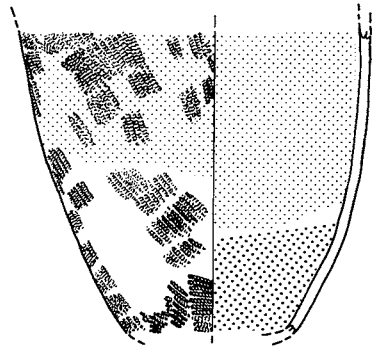
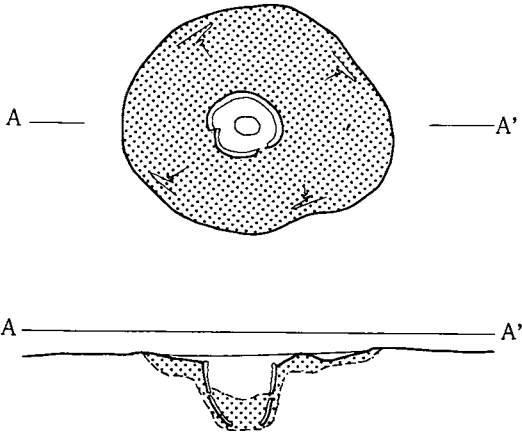


図1. 土器埋設炉周辺の柱穴状土坑分布状態

0 200cm



※土器実測図の縮尺はS = 1 : 4

※土器上半のスクリーン・トーンは、2次熱による風化範囲を示し、下半内面のスクリーン・トーンは炭化物膜付着範囲を示す。

図2. 土器埋設炉実測図

0 50cm

図版9 : G III区土器埋設炉と埋設土器

を確認し、更に数 cm 削平したところ径 75×62 cm、幅 5～10 cm の輪状に分布する焼土を確認した。2 分法によって精査し、土器が埋設されていることが判明した。焼土周辺には囲石等の埋設痕跡はなく、付近から図版 9-1 に示した柱穴様小穴 13 穴を確認した。

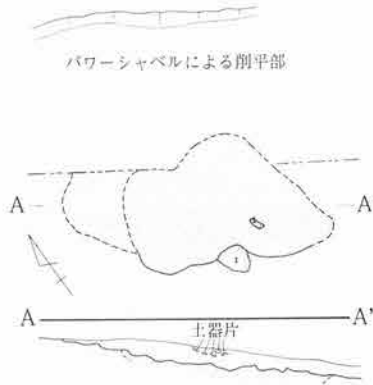
焼土の分布範囲は 75×62 cm の不整楕円形で、ほぼ中央に口縁部と底部を欠いた深鉢形土器が埋設されている。土器埋設穴の掘り込み法方については土器周辺の焼土化が強く不明である。図示したスクリーン・トーンの範囲は、強く変色した焼土の範囲である。土器内の埋土は、上部が焼土粒・炭化物が混じった黒褐色～暗褐色土で土器の破片数点を含み、下部は焼土で非常に固く焼け締まっていた。

土器の現存方量は、器高 164 mm、最大径 186 mm、底径 90 mm、器厚 5～6 mm である。器面は内外面ともに強い 2 次加熱により変色・風化を生じ、全体的に脆弱である。なお、外面下半 2 分の 1 と内面下部の 3 分の 1 ほどが黒褐色～青黒色を呈する。文様は縄文 (RLr) 以外は見られない。

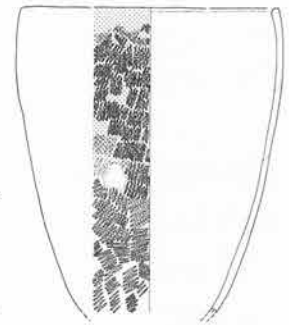
(4) FIV-0 区焼土

(図版 10、写真図版 13-22)

本遺構は、FIV 区の II 層上部を削平した際に土器片・焼土ブロック・炭化物が混在した黒色～黒褐色土が確認された。また、その下部では変色の度合いがあまり強くない II 層下部の焼土化層が観察された。



図版10：FIV-0 区焼土



※土器復元実測図は、S=1:6
 ※焼土実測図は S=1:30
 ※土器実測図のスクリーン・トーンは、炭化物膜の付着範囲を示す。

焼土化層および焼土ブロック混在層の分布範囲は、斜面傾斜方向に長く最大 144 cm、最大幅 69 cm で、その南西辺に偏平な巨礫 1 個、斜面下方より棒状礫 1 個が存在する。図示した土器片等を含む層は、その分布範囲が明瞭ではなく、特に斜面下方では次第に炭化物・焼土ブロックが減り、II 層上部の黒色土層との区別が困難となる。焼土ブロック等の混在状態は、斜面上方部および層下部に多く含まれ、また粒径も斜面下方ほど小粒化し、かつ散在的となる。土層の締まりは普通か、やや軟らかい。下位の焼土層は II 層下部～III 層が弱い焼土化したものであるが、掘り込みあるいは攪乱の形跡は認められない。焼土化層の厚さは地点によって差があり 2～6 cm ほどである。

出土遺物としては、焼土化層の上位層から出土した土器（図版 10 の復元実測図、写真図版 13-22）と前述の使用痕のない礫 2 点である。土器は深鉢形土器で円周の 4 分の 1 程度が復元

されたもので、底部形態は全く不明である。近接する GIV-01 住居址の埋土中から出土した土器片も数点接合している。土器の推定法量は、口径 276 mm、最大径 284 mm、器高 330 mm、器厚 7~8 mm である。縄文は *LR1* で、器外面には広い範囲に炭化物膜が付着している。

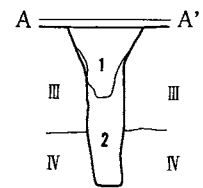
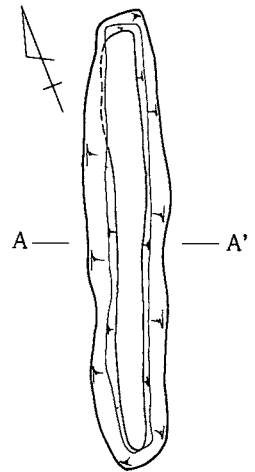
3. 陥し穴状遺構と土坑

(1) DI-001 陥し穴状遺構 (図版 11、写真図版 18-1・2)

本遺構はその主体が DI-W 区にあるが、長軸両端が DI-R・V の調査区に伸びている。確認層位は III 層上部である。規模は、長軸上端 243 cm・同下端 221 cm、短軸上端 29~46 cm・同下端 13~21 cm、深さ 83.5~85.5 cm で、底面は長軸方向・短軸方向ともにほぼ水平である。壁は中端付近までは概ね垂直に立ちあがった後、外傾して開口部に達しているが、長軸北東側の北西壁では一部が外方へ張りだしている。

埋土は 2 層に区分される。1 層は締まりのない黒色土に III 層由来と考えられる黄褐色土のブロックがまだらに混在し、そのブロック土は下部および壁際ほど多く含まれる。2 層は、明黄褐色~黄褐色土の不均一なブロック構成層で黒色土~暗褐色土のブロック土が散在している。

出土遺物は、図版 19-1 (写真図版 15-1)、図版 20-10 (写真図版 16-4)、図版 21-14 (写真図版 16-18)、図版 22-3・9・12 (写真図版 16-22、17-1・3)、の計 6 点の石器・剝片が出土している。(S=1:40)
出土層位は 1 層下部から 2 層上部である。



図版11：DI-001 陥し穴状遺構

(2) DI-002 陥し穴状遺構 (図版 12、写真図版 18-3・4)

本遺構は DI-X 区に位置しており、その確認面は III 層上部である。遺構の北々東側は、調査対象区域外の民有地に伸びており、遺構全体を確認・検出することはできなかった。確認した規模は、長軸上端 190 cm・同下端 131 cm、短軸は断面図作成位置で上端 38 cm・同下端 12 cm で、その他の短軸は上端 38~44 cm、下端が 9~14 cm の範囲にある。深さは 89~90 cm で、底面の長軸方向はほぼ水平であるが、短軸方向は U 字状の断面形を呈する。壁は全体的に III 層の下半の崩壊が見られ、一部は外方へ張り出している。

埋土は 1 層が黒色土、2 層は黄褐色土ブロックを主体とし黒褐色・黒色土のブロックが不規則に混在している。3 層は III 層下部の崩壊土層である。1 層から 3 層まで締まりのない堆積状

態である。

出土遺物は、図版 19-2 (写真図版 15-2) の打製石斧と図版 20-6 (写真図版 16-1) の搔器で、埋土 1 層の下部から出土している。

(3) FIII-023 土坑 (図版 13)

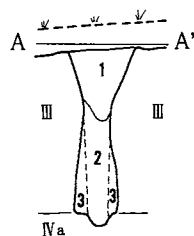
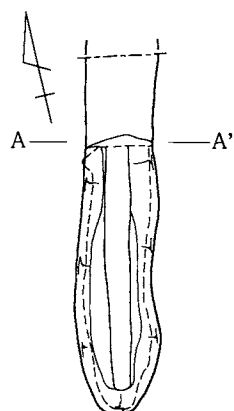
確認区域は FIII-H であり、確認面は IV a 層上面である。当初、単一の土坑と思われていたが、精査の結果 2 基の土坑が重複したものと判断した。北側に張り出した実線部は木根による攪乱部である。

FIII-023 A の規模・形態は、長軸上端 126 cm・同下端 96 cm、短軸上端 108 cm・同下端 81 cm、深さは 13~15 cm である。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは直線的に外傾して立ち上がる部分と内湾ぎみに立ち上がる部分とが見られる。土坑の中心からやや北東には上端径 16×16 cm、下端径 6×7 cm、深さ 21 cm の柱穴状小穴が存在する。埋土 (2 層) は軟らかい暗褐色土に灰白色~黄褐色のシルト質土のブロックが混在する。小穴部の埋土 (3 層) は、黒褐色土と灰黄色シルト質土の混合土で 2 層と同様に締まりがない。

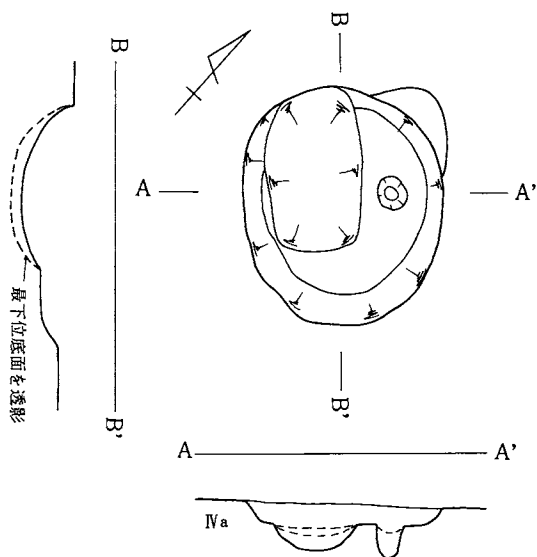
FIII-023 B の規模・形態は、上端が長軸 86 cm・短軸 50 cm である。図版 12: DI-002 陥し穴状遺構

下端は底面全体が球面状をなしているため計測していない。深さは FIII-023 A の底面から 16 cm で、FIII-023 A 確認面からは 31~30 cm である。埋土 (1 層) は、灰白色シルト・黄褐色シルト質土・黒褐色土の小ブロックが混在しており、色調は一定ではない。粘性・締まりがややあり、上部の破線で挟まれた部分は特に固く締まっている。

出土遺物としては、図版 21-10、22-4・5 (写真図版 17-4) の 3 点が FIII-023 A 埋土である 2 層から出土している。21-10 は主要剥離面右縁に微細な剥離とバルブ除去の剥離調整が見られ、背面の右肩にも調整が見られる。



(S=1:40)



図版 13: FIII-023 土坑 (S=1:40)

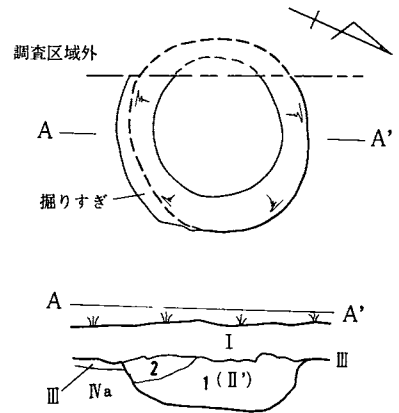
なお背面左縁には自然面が見られ、右縁は欠損している。22-4 はバルブ付近を折断し、剥片端の両面に刃部形成の調整を施した小型の不定形石器である。22-5 は、残核の鋭利な一端に使用痕跡と考えられる剝離が認められるものである。

(4) FIV-029 土坑 (図版 14、写真図版 10-5)

本土坑は FIV-A 区の用地境際で確認したものである。確認面は一部に II 1 層と III 層の薄い層が残る IV a 層上面である。平面形は概ね円形を呈し、底面はほぼ平坦で、壁は内湾ぎみに立ち上がっている。規模は、上端径 52×46 cm、下端径 55×33 cm、上端・下端ともに西南西-東北東方向が大きくなっている。深さは最大 27 cm である。

埋土は 2 層に大別され、1 層は II 層に由来すると考えられる黒色土で、下部に IV a 層の小ブロックが混在する。2 層は黒色土・黄褐色土・灰白色シルトの小ブロック混合土で攪乱された可能性がある。1 層・2 層ともに締まりがなく軟らかい層である。

遺物は少量の炭化物以外、何ら出土していない。

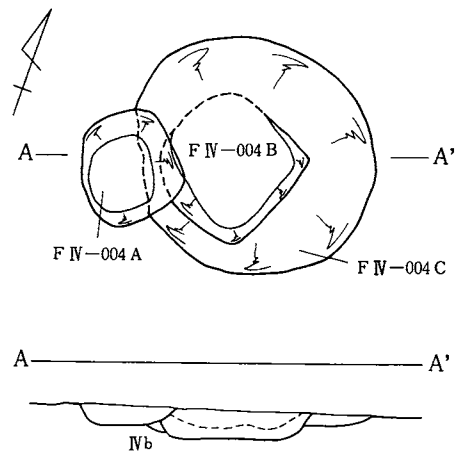


図版14：FIV-029 土坑 (S=1:40)

(5) FIV-004 土坑 (図版 15)

本土坑は新旧 3 基の土坑が重複したものであり、新期から A→B→C とする。確認区域は、F IV-L~R 区にわたっているが、主体は FIV-Q 区にある。確認面は IV b 層上面である。確認当初、FIV-004 B と FIV-004 C との関係は何らかの構造物撤去跡と構築時の掘り方痕跡と考えていたが、調査した結果、別遺構と判断した。

FIV-004 A 土坑：不整な隅円方形を呈し、上端の長軸 57 cm、短軸 51 cm、下端の長軸 38 cm、短軸 34 cm、深さは 9~10 cm である。埋土は、黒褐色土に少量の灰白色シルトブロックが混在したものである。遺物は出土していない。



図版15：FIV-004 土坑 (S=1:40)

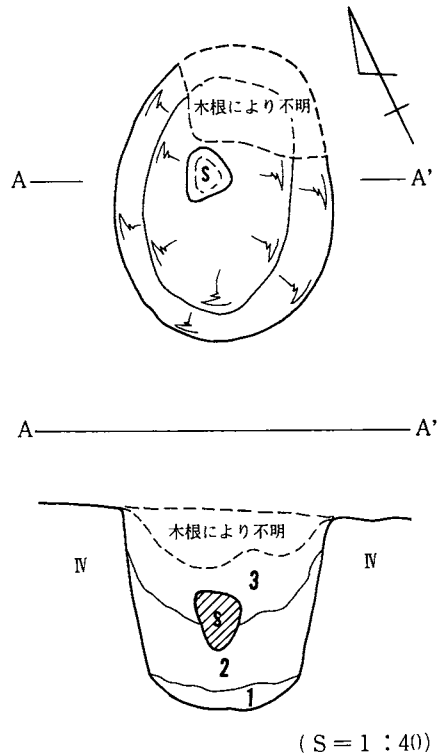
FIV-004 B 土坑：北西辺が不明瞭な土坑であるが、上端が 68×66 cm、下端が 55×60 cm、深さ最大 11 cm の方形土坑と思われる。埋土は、破線付近の上部と下部でわずかな差が認められる。下部は灰褐色～黄褐色のシルト小ブロックを主体とし、黒色土・黒褐色土の小ブロックが混在する。上部は下部の土に暗褐色～褐色の粘質土ブロックが混在している。上部・下部ともにブロック土構成ながら全体的にしまっており、逆に壁となるべき FIV-004 C 土坑の埋土の方が軟らかく崩れやすい。遺物は出土していない。

FIV-004 C 土坑：南西辺と中央付近を新期の土坑に切られていることや、底面から壁への変換部が不明なことから下端形状は不明である。上端径は 133×120 cm で北西－南東方向がやや長く、深さは 7～20 cm である。埋土は、黄褐色シルトの小・中ブロックを含む砂質の黒色～黒褐色土である。締まりは普通かやや堅いと言える。遺物は出土していない。

(6) GIV-006 土坑

本遺構は、一部 GIV-B 区にあるがその主体は GIV-C 区に位置している。確認状況は、GIV-02 住居址と同様 IV a 層上面である。土坑の北東側には木根があり、全景を確認・記録するには至らなかった。確認した規模は、長軸上端 120 cm・同下端 108 cm、短軸上端 115 cm・同下端 76 cm、深さ 78 cm である。下端については底面形態が凹面をなしていることから実測断面図の 1 層と 2 層との層界線付近を計測し図化している。平面形状は、長軸 150 cm 前後の楕円形と思われる。

埋土は 3 層に区分したが、木根の生えている 3 層上部（破線以上）は性状を観察できなかった。1 層は上位の 2 層に近似する黒色～黒褐色土（10 YR 2/1～2/2）であるが黒色の度合いが強く、黒色～青黒色土（10 YR 1/1 や B 2/1）の小ブロックを含む。また 2 層との境付近には灰白色土粒が多い。2 層は灰白色土ブロック、黄褐色土、褐色土のブロックを不規則に含んだ黒色～黒褐色土（10 YR 2/1～2/2）で全体的にまだらな色調分布を示している。3 層は黒色～黒褐色土（10 YR 2/1～2/2）であるが、



図版16：GIV-006土坑

下部の礫周辺は灰白色土の小ブロックを含んだ黒褐色～暗褐色土である。本層下部から2層上部にかけて三角錐状の円礫(24×25×32 cm)1点が存在する。埋土全体の締まり具合は、普通かやや軟らかい。出土遺物としては、先の礫の他に縄文(LRI)を有する土器小片6点が2層・3層から出土している。

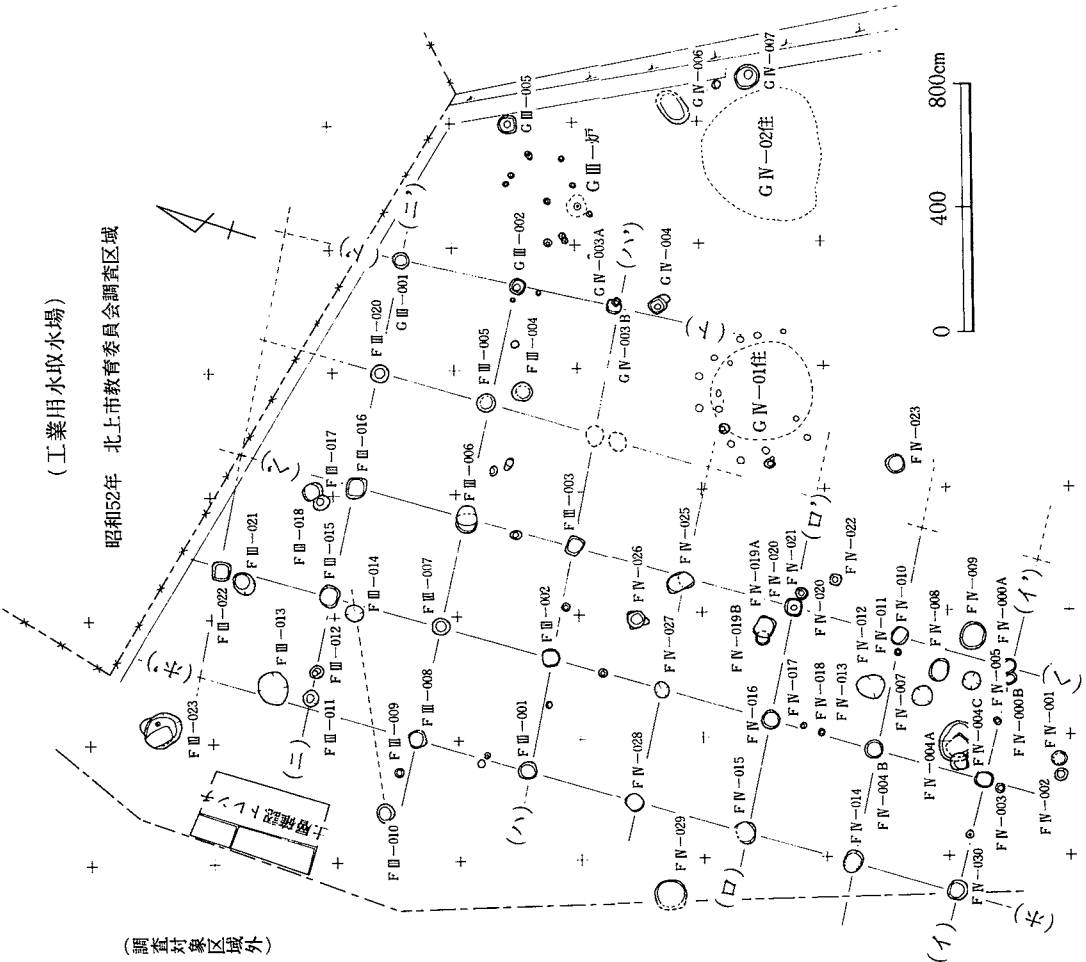
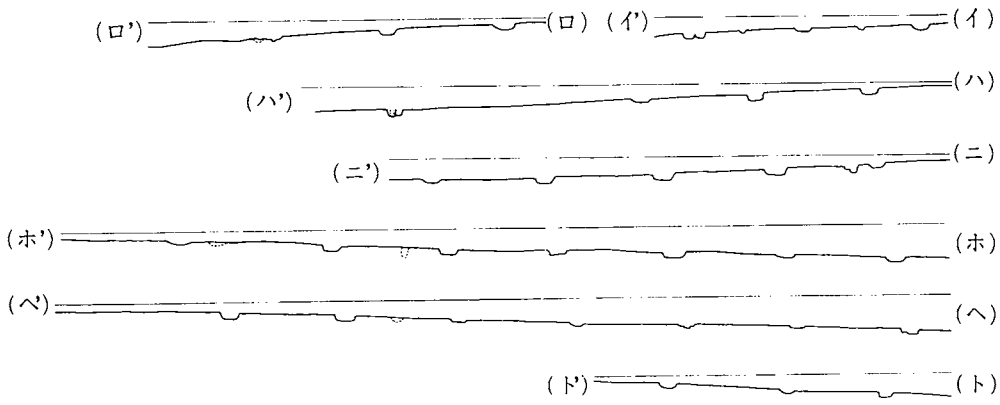
4. 建物跡様の配列を示す土坑群 (図版17 写真図版9)

取水場建設区域の西側から北西側、特にFIII・FIV区を中心に大小55基の土坑が分布する。これらの土坑群のうち30基は、東西4間(14.48 m)、南北6間(23.22 m)の鍵形を呈する線上に位置しており、その配列が掘立柱式建物跡様となるものの、25基の土坑は配列からは若干ずれる。鍵形配列の全体形状は北東-南西方向にやや長い平行四辺形状にゆがんでおり、二～二'線(略東西方向)は真北方向と83度20分の角度を有し、ホ～ホ'線(略南北方向)は、真北に対して西偏2度15分の角度を有する。この他に径15～20 cm・深さ20～25 cmの柱穴様小穴19基が見られ、一部のものは土坑配列の線上に位置している。

検出状況は、一部のものを除いて基本土層のI層を除去した段階で確認しているが、埋土がII層土のものはIII層・IV層の上面で確認している。埋土は全体的にII層の黒色土を主体としたものに黄褐色土・褐灰色土等の大小ブロックが混じった単層のものがほとんどであり、基本土層のI層土で構成されたものは認められない。なお、埋土断面・土坑底面に柱根跡と考えられる状態を有するものは7基(FIV-020、FIV-021、GIII-002、GIII-005、GIV-003 A、GIV-004、GIV-007)認められたが明確なものではない。土坑の平面形状は円～楕円形のものと同方形～隅円方形のものに大別され、両形状の土坑が重複する4例の場合、3例では後者のものが新しい。平面規模は最小24×24 cm、最大128×108 cm、深さは4～41 cmの間にある。各土坑の規模・土坑中心間距離は以下の表1および表2に示したとおりである。

表1 土坑規模一覧 (単位: cm)

土坑番号	長×短	深	土坑番号	長×短	深	土坑番号	長×短	深	土坑番号	長×短	深
BI-001	60×55	11	FIII-007	56×54	26	FIII-022	60×58	21.5	FIV-014	72×58	14
GIII-001	56×52	17	FIII-008	54×54	21	FIII-023	128×108	29	FIV-015	76×60	22.5
GIII-002	52×48	4	FIII-009	24×24	5	FIV-000A	48×40	14	FIV-016	60×56	16.5
GIII-005	60×56	36	FIII-010	56×56	16	FIV-000B	44×36	11	FIV-019A	68×60	7.5
GIV-003A	28×24	16	FIII-011	56×50	13	FIV-001	48×48	41	FIV-019B	44×44	4
GIV-003B	48×44	18	FIII-012	44×40	24	FIV-002	40×40	6.5	FIV-020	56×52	16
GIV-004	52×50	22	FIII-013	108×96	14	FIV-003	56×52	11.5	FIV-021	38×36	8
GIV-007	86×80	13	FIII-014	54×54	17	FIV-005	60×56	7.5	FIV-022	36×34	16
FIII-001	56×56	21.5	FIII-015	68×60	24.5	FIV-007	68×64	10.5	FIV-025	60×42	(1.5)
FIII-002	56×54	23	FIII-016	70×60	22	FIV-008	72×60	12	FIV-026	56×52	29
FIII-003	56×50	6	FIII-017	56×44	18.6	FIV-009	88×80	22	FIV-027	52×44	15.5
FIII-004	64×60	17.5	FIII-018	68×48	16	FIV-010	56×52	7.5	FIV-028	64×52	22.5
FIII-005	58×58	17	FIII-020	58×56	32	FIV-012	92×72	14.5	FIV-030	66×64	15.5
FIII-006	84×64	22.5	FIII-021	80×66	22.5	FIV-013	60×60	19			



図版17：建物跡様配列の土坑群

表2 土坑間距離測表 (単位: cm)

《イ～イ'線》	計	758cm	《ニ～ニ'線》	計	1448cm	《へ～へ'線》	計	2214cm
FIV-030～FIV-003		380cm	FIII-011～FIII-012		92cm	FIV-000A～FIV-010		376cm
FIV-030～FIV-00A		378cm	FIII-012～FIV-015		242cm	FIV-010～FIV-020		362cm
《ロ～ロ'線》	計	750cm	FIII-015～FIII-016		368cm	FIV-020～FIV-025		370cm
FIV-015～FIV-016		372cm	FIII-016～FIII-020		376cm	FIV-025～FIV-003		378cm
FIV-016～FIV-020		378cm	FIII-020～GIII-001		370cm	FIII-003～FIV-006		356cm
《ハ～ハ'線》	計	1530cm	《ホ～ホ'線》	計	2322cm	FIII-006～FIII-016		372cm
FIII-001～FIII-002		372cm	FIV-030～FIV-014		352cm	《ト～ト'線》	計	716cm
FIII-002～FIII-003		368cm	FIV-014～FIV-015		360cm	GIII003～GIII002		328cm
FIII-003～GIV-003B		790cm	FIV-015～FIV-028		376cm	GIII002～GIII001		388cm
			FIV-028～FIII-001		360cm			
			FIII-001～FIII-008		378cm			
			FIII-008～FIII-013		496cm			

V 出土遺物について

出土遺物の総量は、浅いコンテナで4箱ほどである。種類としては、縄文時代の土器・土製品・石器・石製品、土師器片、瓦器片、陶器片、そして鉄製品の断片である。量的には縄文時代の土器が多いものの、まとまりのない出土状態でかつ摩滅した破片が多く、時期を判定できるものは少ない。更に器形を推定できる程度に復元されたものは7個体であるが、GW-01住居址出土の小型台付鉢(図版5-1)及び埋設土器を除けば何れも全体形の2分の1未満である。

遺構外出土の石器は一部がI層から出土しているものの、他はII層からIII層上部にかけての出土で、特にDI区・EI区で出土した搔器・削器、不定形石器、および打製石斧はII層下部からIII層上部にかけて出土している。

1. 土器・土製品

土器・土製品としては、縄文時代早期の土器片、同後期～晩期初頭の土器片、土師器片、瓦器片、陶器片、土偶頭部が出土している。

(1) 縄文時代早期に属する土器片で貝殻腹縁刺突文?をもつもの1点、表裏面に貝殻条痕文が施され補修孔のあるもの1点、尖底部周辺や体部の破片で縦位・横位のミガキ調整痕をもつもの3点の計6点がII層下部から出土している。何れも風化が激しく文様の詳細は不明である(写真図版13-1～6)。

(2) 縄文時代後期前葉と思われるもので、縄文RLrを地文とし沈線区画による曲線状の磨消縄文によって文様を形成している。器種や文様構成は不明である(図版18-1、写真図版13-9他1点の計3点出土)。

(3) 口縁部付近に平行沈線区画による文様帯が形成されるものを一括した。しかし、沈線形態、推定器形等は必ずしも同様ではなく、①口唇下 20～30 mm の範囲に口唇に平行する 1～2 条の沈線が施され沈線間が無文研磨のものと、②口唇に平行する 2～4 条の沈線が口縁部の無文帯、体部の縄文部にまで施されるものとに大別される（図版 18-6・9、写真図版 13-8・12・13・16・17・18・21 など 18 点）。

(4) 口縁に短い間隔で小突起をもち、更に口縁に平行する沈線と口唇との間には半円状の沈線が連続して施されているもの（写真図版 13-11、1 点）である。

(5) 三叉状沈線文、三叉文を有する土器片を一括した。これらは①沈線によって区画された磨消縄文帯や縄文帯が入組文様の構成をなし、沈線文の一端が三叉状文となるもの（図版 8-1、写真図版 12-4、同 13-14・19・20）、②沈線による円を抱えるように左右に三叉状沈線文が施されるもの（図版 18-10、写真図版 13-15）、③三叉状沈線文の有無は明確ではないが、①と同様に沈線によって区画された縄文帯・無文帯が入組状の文様構成をとるもの（写真図版 13-10）、など計 8 点が出土している。

(6) 口唇下 30 mm 付近に波状の沈線が施されて、沈線の下位は縄文 *RLr*、上位には口唇下 10 mm ぐらいの幅で縦位の刻様押圧文が施されている（図版 18-4、写真図版 13-7 の 1 点）。

(7) 縄文時代の土器には、以上の他に縄文地だけのもの、無文地だけのもの、が見られる。縄文の種類としては施文手法や原体個々の差は認められるものの、図版 13-3（写真図版 14-4）以外は *RLr* と *LRI* の 2 種類であり、撚糸文、羽状縄文、結節縄文は認められない。

(8) 内面を黒色処理したロクロ不使用の坏形土師器小破片（11 点）、および肩部に斜格子沈線文の施された甕形土師器片（2 点）、および坏形土師器と同様の胎土を有する異形土師器の破片（5 点）を一括した（図版 18-18、写真図版 14-6～14、同 14-9）。坏形土師器は接合するものではなく、器厚・口唇部断面形から 2 個体分ぐらいの破片である。甕形土師器は、推定口径 120～130 mm、最大径部 130 mm 前後の小型の甕と考えられる。内面の口縁付近と外面の一部にヘラナデおよび指頭によるナデが見られる。所属時期は平安時代と思われるが、詳細は不明。

(9) 陶器片 1 点、瓦器片 2 点を一括した。陶器片（写真図版 14-17）は、内面に青釉を施し外面にロクロ目の見られる底部付近の小破片である。器種は皿と思われるが断定しかねる。瓦器片のうち写真図版 14-16 は器内外面ともにロクロ目が見られる台付鉢の破片で、内外面とも黒色処理がなされている。台部の推定径は 72～75 mm である。写真図版 14-15 は素焼状態の断片で、器面には何らの処理痕跡も認められない。

(10) 土製品は土偶頭部 1 点だけである（図版 18-17、写真図版 14-5）。顔面は鼻部および眉部の隆起部を除けば平面的なつくりであり、顔面高 41 mm、顔面幅 37.5 mm、全高 46 mm、最大厚 27 mm である。後頭部は前面に入りこんだ仮面状のつくりで、眼裂・口唇裂は細い角棒状

工具の一端で沈刻形成され、鼻孔は同様の工具で刺突孔として表現されている。また頸部には同様の工具による一条の沈線が施されているが、欠損部のため一周するか否かは不明である。

2. 石器・石製品

石器・石製品およびこれらの碎片は 85 点出土しており、人為破碎と思われる礫片等を加えると 118 点となる。

(1) 打製石斧・筥状石器と呼ばれる石核石器・剝片石器を一括した。これらは大きさ、素材形態の区分から次のようになる。

① 比較的大型の分厚い剝片素材や礫石核から製作されたもので、主面の一部に自然面を残しているもの。概ね基部が細く成形調整されており、刃縁よりやや身部よりには最大幅をもつ。刃部断面は片刃、および偏両刃のつくりとなっている(図版 19-1・2・3、写真図版 15・1・2・3)。

② 礫核素材の大型のもので 2 主面、その他に自然面を残しているもの(図版 19-4・5、写真図版 15-4・5)。図版 19-4 は、2 主面に広く自然面を残し、成形調整のための側縁加工と刃部形成のため片面に調整を加えているだけである。自然面を刃面として部分には使用によると考えられる線状痕が見られる。図版 19-5 は 1 主面に素材の厚さを減らすため側縁から深い剝離が加えられ、自然面はわずかに残るだけであるが、他の主面や側縁には自然面が広く残っている。2 例の刃縁形状は異なるが、刃部断面形は弱い偏両刃となっている。

③ 大型の分厚い剝片を素材としており、1 主面の全面、あるいは一部に自然面を残し、加工調整は 1 面にしかなされていないもの(図版 20-3・4、写真図版 15-9・10)、図版 20-3 は、刃部形成のための加工調整がなされただけであり、他は剝片時の状態のままである。図版 20-4 は、1 主面の全面に自然面を残したものであり、図右には破損時の大きな剝離がある。

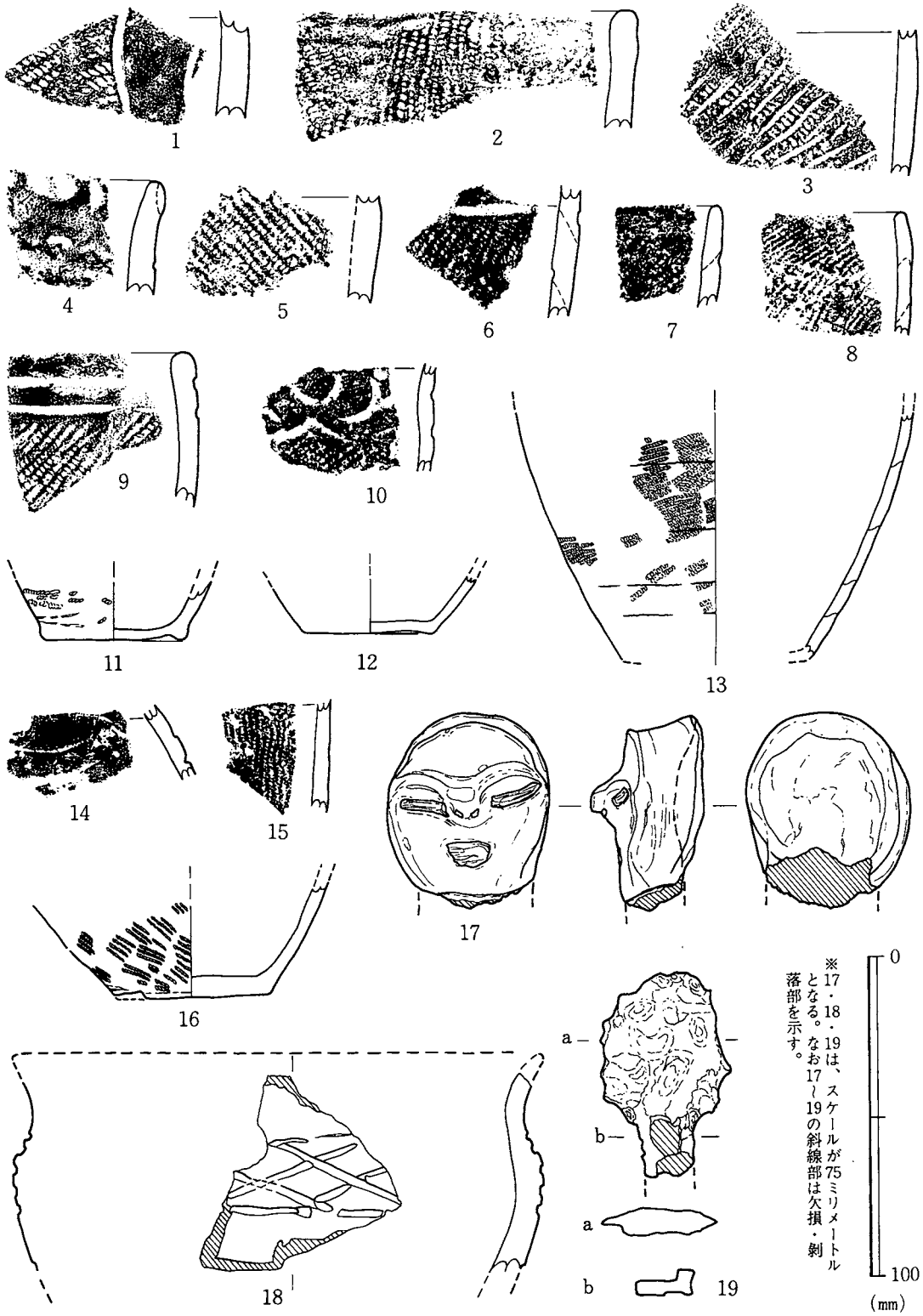
④ 中型の剝片素材を用いているもの。1 主面に主要剝離面を残し、他の主面全面に調整加工が施されている。刃部断面は片刃となっている(図版 20-1・5、写真図版 15-6・8)。

⑤ 小型の剝片を素材とした全面加工のもの 1 点(図版 20-2、写真図版 15-7)。刃部断面は片刃で、基端は尖基となっている。

(2) 搔器・削器 本種に区分した石器は、遺構内外から 8 点出土している。これらは加工部位のありかたによって以下のように区分される。

① 横長剝片の側縁部に刃部を形成したもの。図版 8-10 の図下端と右縁の下半に 70~75 度の刃部形成の調整を施している。他の縁辺には鋭角部除去、潰しの加工がなされている(図版 8-10、写真図版 12-10)。

② 打面周辺を除いた縁辺に調整加工を施しているが、剝片端と側縁とでは刃部角が異なるもの。剝片端の角度は 70 度前後の調整加工が、使用によって一部 90 度前後となっている。側



※17・18・19は、スケールが75ミリメートルとなる。なお17・19の斜線部は欠損・剝落部を示す。

図版18：土器・土製品・鉄製品

縁は左右で若干異なるが40～45度となっている(図版20-6、写真図版16-1)。

③ 剥片端にだけ刃部形成の調整加工がなされているもの(図版20-8、写真図版16-3)。

④ 剥片端および1側縁に刃部が形成され、他の縁辺には鋭角部除去、潰しの調整加工が施されたもの(図版20-7・9、写真図版16-2・7)。

⑤ 剥片の1側縁にだけ刃部形成の調整加工が施され、他の縁辺は粗い整形調整だけのもの(図版20-10、同21-1、写真図版16-4・5)。2点とも、同一母岩から作出された素材を使用している。

⑥ 縦長剥片の背面両側縁に調整加工を施し刃部としており、身部形状が三角形を呈するもので、打面周辺にツマミが形成されれば石匙としても良い器形である(図版21-8)。

(3) 不定形石器 剥片の一端、あるいは一部に加工調整が施されているものの器種を特定できないものや、折損等によって本来の器種が不明のものを一括した。これらは加工部位等によって以下に細分した。

① やや横長の剥片端中央付近(図上端)にツマミ部形成様の加工が認められるが、ツマミとは断定できない。また他には何らの加工調整も認められない(図版21-3、写真図版16-11)。

② 折損等のため本来の器形が不明であるものの、1側縁や基部周辺に不規則な加工が見られるもの(図版21-2・4・9・10・14、写真図版16-8・10・14・18)。

③ 剥片の一端、あるいは側縁の一部に不規則な加工調整が見られるもの(図版21-6・13、22-2・9、写真図版16-13・17・20、17-1)。

④ 折断剥片の一部に調整加工を施しているもの(図版21-5・12、22-1・4、写真図版16-6・9・19、同17-4)。図版21-5・12、22-1は剥片の基部側・剥片端側を除いたものの1側縁等に調整を施しており、図版22-4は基部の打瘤部を折断除去している。

⑤ 小剥片の両面に不規則な調整加工が施されているが器種を特定できないもの(図版22-4、写真図版17-4)。本石器も④の一部と同様に打瘤部周辺が折断除去されている。

(4) 使用痕跡と考えられる不規則な小剥離の見られる剥片(図版8-11・12、21-7・11、22-5、写真図版12-12、16-15・16)。

(5) 石核 石核と考えられるものは、GW-02住居址出土の全面調整石核(図版8-13、写真図版12-11)と図版23-1・2(写真図版17-7・8)の3点である。図版8-13は比較的大型の石核であり、図版23-1は小型の剥片を作出した残核である。図版23-2は広い範囲に自然面を残しているが、一部を調整した後に1枚の小型剥片を作出しただけである。

(6) 剥片 剥片として処理したものの中には①剥片端等が欠損(折断か?)しており、加工調整・使用痕跡が見られないもの(図版22-6・7・10、写真図版16-21、17-6)、②その他、石核調整剥離面や剥片剥離面が見られるものの2次加工・使用痕跡の認められない剥片(図版

22-8・12~16 他) とが存在する。

(7) 石製円盤 剝離痕と敲打痕をもつもの2点が出土している(図版23-3・4、写真図版17-14・15)。図版23-3は、側縁と2平面縁辺に剝離痕が、そして側縁全周に敲打作用による平滑面が形成されている。また2平面には摩滅痕が認められる。図版23-4は、小単位の敲打痕面の集合によって側縁が成形・調整されているが、2平面は自然のままである。

(8) 擦石・叩石・クボミ石等 破碎小断片を除けば6点出土している。これらは素材形状、作用痕跡の種類、あり方から、次のような特徴をもっている。

① やや偏平な円礫の一端に、破碎剝離を伴う粗い敲打痕面が形成されているもの(図版8-14、写真図版12-14)。

② 円礫の比較平坦な2~3面に、やや粗い擦面・敲打面が形成され、また頂端部には敲打痕面が形成されているもの(図版8-15、写真図版12-18)。

③ 偏平で棒状を呈する礫の側縁や端部に敲打・擦による作用面が形成されているもの(図版23-5・6・7、写真図版17-9・12・13)。写真図版12-15・17の2点(GIV-02住居址)は、遺存する縁辺の敲打痕から本種の破碎片と考えられる。

④ 礫の側面にベッキング様の敲打作用痕が集中し、やや凹んでいるもの。しかし作用の程度が弱いためか、明確に凹石とは呼びがたい(図版23-9、写真図版17-11)。なお、本石器では、他の側縁などに敲打剝離や粗い敲打痕も認められる。

(9) 棒状礫の一頂端に敲打痕や敲打破砕面をもつもの(図版23-10、写真図版17-10)。本石器には側面からの剝離や潰しが見られることから、石棒等の磨製石器の未製品とも考えられる。

(10) 磨製石器断片 破碎片のため器種は特定しかねるが研磨面の曲率や岩質から石棒石剣類の断片と思われる(写真図版12-8)。

表3 掲載石器計測表 (1)

通称 番号	図版	写真 真版	出土区・層位等	器種	法量(単位mm、g)				岩質・産地・生成年代	備考
					長	幅	厚	重量		
1	6-6	11-10	GIV-01住	(土掘具)	168	100	70	1500	玻璃質流紋岩・奥羽山地・新第三系	
2	6-15	11-15	GIV-01住	台石	(146)	(85)	43	(540)	ホルンフェルス・北上山地・古生界	
3	8-8	11-13	GIV-02住埋		(41)	(47)	20	(32.6)	粘板岩・北上山地・古生界	
4	8-9	11-16	GIV-02住小土坑	棒状礫	171	35	16	150	チャート・北上山地・古生界	
5	8-10	11-10	GIV-02住床	撥器	63	31	11	165	珪質泥岩・奥羽山地・新第三系	
6	8-11	11-12	GIV-02住埋	U: フレーク	41	46	10	13.4	硬質泥岩・奥羽山地・新第三系	
7	8-12	—	GIV-02住床	R: フレーク	28	44	9	7.4	凝灰質硬質泥岩・奥羽山地・新第三系	
8	8-13	11-11	GIV-02住床	石核	76	47	23	85	珪質泥岩・奥羽山地・新第三系	床土に埋没
9	8-14	11-14	GIV-02住	撥石	112	72	47	540	両輝石安山岩・奥羽山地・新第三系	
10	8-15	11-18	GIV-02住床	敲石	119	96	82	1440	両輝石安山岩・奥羽山地・新第三系	
11	19-1	15-1	D1-001陥し穴状	打製石斧	90	36	17	544	珪質細粒凝灰岩・奥羽山地・新第三系	
12	19-2	15-2	D1-002陥し穴状	打製石斧	98	42	17	80	珪質細粒凝灰岩・奥羽山地・新第三系	
13	19-3	15-3	GIV・B-II	打製石斧	107	40	17	75	珪質細粒凝灰岩・奥羽山地・新第三系	

表3 掲載石器計測表 (2)

通算 番号	図版	写真 真影	出土区・層位等	器 種	法 量 (単位 mm, g)				岩質・産地・生成年代	備 考
					長	幅	厚	重 量		
14	19-4	15-4	FIII-019埋	打製石斧	109	57	20	180	粘板岩・北上山地・古生界	
15	19-5	15-5	EI・W-II1	打製石斧	113	56	25	160	珩質細粒凝灰岩・奥羽山地・新第三系	
16	20-1	15-6	DI・X-IIIu	打製石斧	65	35	16	34.4	珩質細粒凝灰岩・奥羽山地・新第三系	
17	20-2	15-7	DI・Y-II1	打製石斧	41	22	9	5.6	チャート・北上山地・古生界	
18	20-3	15-9	GIV・F-II		110	73	20	210	玻璃質流紋岩・奥羽山地・新第三系	
19	20-4	15-10	BI・X-II1	打製石斧(石鏃)	90	86	(15)	180	粘板岩(ホルンフェルス)・北上山地・古生界	
20	20-5	15-8	EI・X-IIIu	打製石斧	55	40	17	42.4	硬質泥岩・奥羽山地・新第三系	
21	20-6	16-1	DI-002陥し穴	播器	42	45	16	35.6	珩質細粒凝灰岩・奥羽山地・新第三系	
22	20-7	16-2	DI・X-IIu	播器	55	43	14	33.1	硬質泥岩・奥羽山地・新第三系	
23	20-8	16-3	GIV・F-II	播器	46	38	12	23.3	硬質泥岩・奥羽山地・新第三系	
24	20-9	16-7	EI-IIu	播器	53	45	11	35.2	凝灰質硬質泥岩・奥羽山地・新第三系	
25	20-10	16-4	DI-001陥し穴状	削器	(50)	56	13	32.6	凝灰質硬質泥岩・奥羽山地・新第三系	
26	21-1	16-5	DI・Y-II1	削器	50	49	9	16.8	凝灰質硬質泥岩・奥羽山地・新第三系	
27	21-2	16-8	BI・Y-IIIu	不定形石器	(56)	46	14	43.4	凝灰質硬質泥岩・奥羽山地・新第三系	
28	21-3	16-11	FI・V-IIu	石匙	44	57	7	16.5	珩質細粒凝灰岩・奥羽山地・新第三系	
29	21-4	16-10	FIII-IIu粗	?	(30)	37	8	10.5	輝緑凝灰岩・北上山地・古生界	
30	21-5	16-9	CI-W-II1	不定形(折断)	50	37	9	13.5	凝灰質硬質泥岩・奥羽山地・新第三系	
31	21-6	16-13	BI-U-II1	(一端を折断)	56	31	13	16.0	珩質泥岩・奥羽山地・新第三系	
32	21-7	16-15	BI-V-IIIu	U:フレーク	40	19	6	3.3	硬質泥岩・奥羽山地・新第三系	
33	21-8	16-12	BI-U-II1	削器	80	39	12	34.9	珩質泥岩・奥羽山地・新第三系	
34	21-9	16-14	DI・X-II1	不定形石器	44	23	12	10.4	硬質泥岩・奥羽山地・新第三系	
35	21-10	—	FIII-023土坑	不定形石器	41	18	7	5.7	珩質泥岩・奥羽山地・新第三系	
36	21-11	16-16	FIII-II粗	不定形石器(折断)	(34)	(28)	13	9.4	硬質泥岩・奥羽山地・新第三系	
37	21-12	—	EI・X-II1	不定形石器(折断)	40	22	11	7.5	凝灰質硬質泥岩・奥羽山地・新第三系	
38	21-13	16-17	DI-U-II1	不定形石器(折断)	33	40	8	9.0	珩質細粒凝灰岩・奥羽山地・新第三系	
39	21-14	16-18	DI-001陥し穴状	不定形石器	(25)	49	9	10.7	凝灰質硬質泥岩・奥羽山地・新第三系	
40	22-1	16-19	GIV-B-II	不定形石器(折断)	(23)	(46)	11	6.0	硬質泥岩・奥羽山地・新第三系	
41	22-2	16-20	FIV-IIu粗	R:フレーク	23	38	8	11.3	凝灰質硬質泥岩・奥羽山地・新第三系	
42	22-3	16-22	DI-001陥し穴状	不定形石器	25	23	5	2.3	硬質泥岩・奥羽山地・新第三系	
43	22-4	17-4	FIII-023土坑	不定形石器	(24)	(23)	7	3.6	珩質泥岩・奥羽山地・新第三系	
44	22-5	—	FIII-023土坑	U:フレーク	45	25	10	16.9	珩質泥岩・奥羽山地・新第三系	
45	22-6	16-21	BI-Y-IIIu	U:フレーク	(38)	18	7	4.7	輝緑凝灰岩・北上山地・古生界	
46	22-7	—	EI・X-II1	フレーク	(38)	31	10	7.6	輝緑凝灰岩・北上山地・古生界	
47	22-8	17-2	EI・X-IIu	フレーク	55	54	8	19.9	珩質細粒凝灰岩・奥羽山地・新第三系	
48	22-9	17-1	DI-001陥し穴状	R:フレーク	56	66	19	55.8	硬質泥岩・奥羽山地・新第三系	
49	22-10	17-6	BI-V-II1	U:フレーク	47	(42)	15	21.4	凝灰質硬質泥岩・奥羽山地・新第三系	
50	22-11	—	FIII-P-IVu	U:フレーク	34	36	11	10.8	珩質泥岩・奥羽山地・新第三系	
51	22-12	17-3	DI-001陥し穴状	フレーク	49	39	9	22.0	珩質細粒凝灰岩・奥羽山地・新第三系	
52	22-13	17-5	DI-X-I(粗)	U:フレーク	19	27	4	1.3	(未同定)	
53	22-14	—	FIV-004土坑	フレーク	19	27	6	3.2	珩質泥岩・奥羽山地・新第三系	
54	22-15	—	FIII-016土坑	フレーク	46	32	13	16	凝灰質硬質泥岩・奥羽山地・新第三系	
55	22-16	—	FI-X-II1	フレーク	29	38	9	10.4	珩質細粒凝灰岩・奥羽山地・新第三系	
56	23-1	17-8	GV-IIu粗	残核	29	29	11	10.3	(未同定)	
57	23-2	17-7	FV-II粗	石核	23	29	23	16.1	(未同定)	
58	23-3	17-14	GV(To・II)粗	石製円盤	75	68	31	290	玻璃質流紋岩・奥羽山地・新第三系	
59	23-4	17-15	(表探)	石製円盤	56	58	19	100	玻璃質流紋岩・奥羽山地・新第三系	
60	23-5	17-13	GV(To・I)粗	擦石・敲石	84	49	29	250	角閃黒雲母花崗岩・北上山地・古生界	
61	23-6	17-12	BI-I-b粗	擦石・敲石	118	81	53	620	両輝石安山岩・奥羽山地・新第三系	
62	23-7	17-9	GIII・V-II	擦石・敲石	142	60	43	680	両輝石安山岩・奥羽山地・新第三系	
63	23-8	—	GV(To・II)IIu粗	?	93	36	17	45.6	緑色凝灰岩・奥羽山地・新第三系	
64	23-9	17-11	GV(To・II)IIu粗	擦石(クボミ石)	99	87	48	560	両輝石安山岩・奥羽山地・新第三系	
65	23-10	17-10	CI-IIIu粗	?	191	56	29	470	粘板岩(ホルンフェルス)・北上山地・古生界	

3. 金属製遺物

金属製遺物は、図版 18-19 (写真図版 14-15) に示した鉄製品断片 1 点だけである。出土層位は I b 層で、平面形は鉄鏃に近似しているが錆化膨れ、欠損のため本来の器種・器形は不明である。現存法量は、最大長 48 mm、最大幅 31 mm、最大厚 6.7 mm、重量 28 g である。

VI まとめ

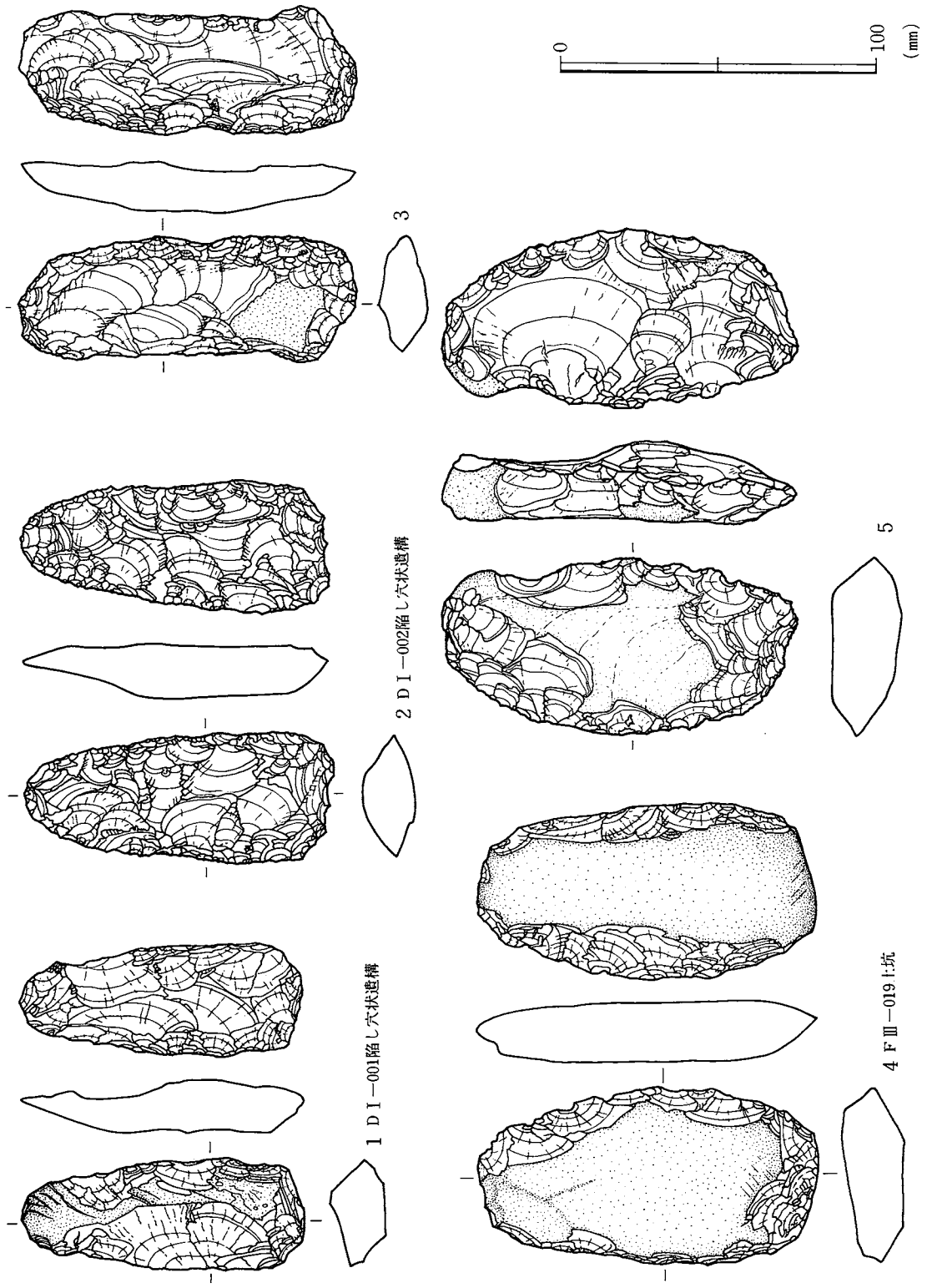
当初予想された二子城坊館跡に伴う遺構は発見されなかったが、縄文時代の竪穴住居址、土器埋設炉、陥し穴状遺構などが発見されたことは、坊館跡が縄文時代の集落および狩場としても利用されていたことが明らかとなった。また、数種の土坑はその形態や在り方から縄文時代の墓坑や貯蔵穴と考えられるものも含まれるが、掘立柱式建物跡様の配列を示す小土坑群については所属する時代・時期、性格は不明である。

竪穴住居址の所属時期については、何れも良好な遺物を伴わないことから断定しがたいが、GIV-01 住居址は、床から出土した深鉢形土器 2 個体分の破片 (図版 5-5、6-7) と埋土出土の小型台付鉢 (図版 5-1)、そして図版 6-8・14 の土器片から判断すると縄文時代後期末葉～晩期初頭と考えられる。しかし、深鉢形土器は器形が後期前葉のものに近似することから、より古い時期の可能性も考えられる。GIV-02 住居址は、埋土中から出土した図版 8-1 の土器片から縄文時代後期後葉以降と考えられる。

土器埋設炉、および焼土については、何れも確証はないが、2 棟の住居址と近い時期にあるものとする。

土坑のうち GIV-006 は、その所属時期が不明であるが、埋土下部が人為的であることや、中央付近に点石をもつことから縄文時代後期・晩期の墓坑と考えられる。他に埋土の状態などから縄文時代と考えられる土坑として FIII-023 A、FIV-029、FIV-004 C の 3 基がある。FIV-029 は、貯蔵穴の可能性が考えられるが、他の 2 基については不明である。

建物跡様の配列を示す土坑群は、円形・方形の土坑の重複関係などから同一地点において 2 時期の形成期が存在することは明らかである。また一部の土坑では、その底面や埋土に柱痕跡に近似した状態をもってはいるものの積極的に掘立柱式建物跡と言えるものはない。また所属する時代を示す資料も存在しない。



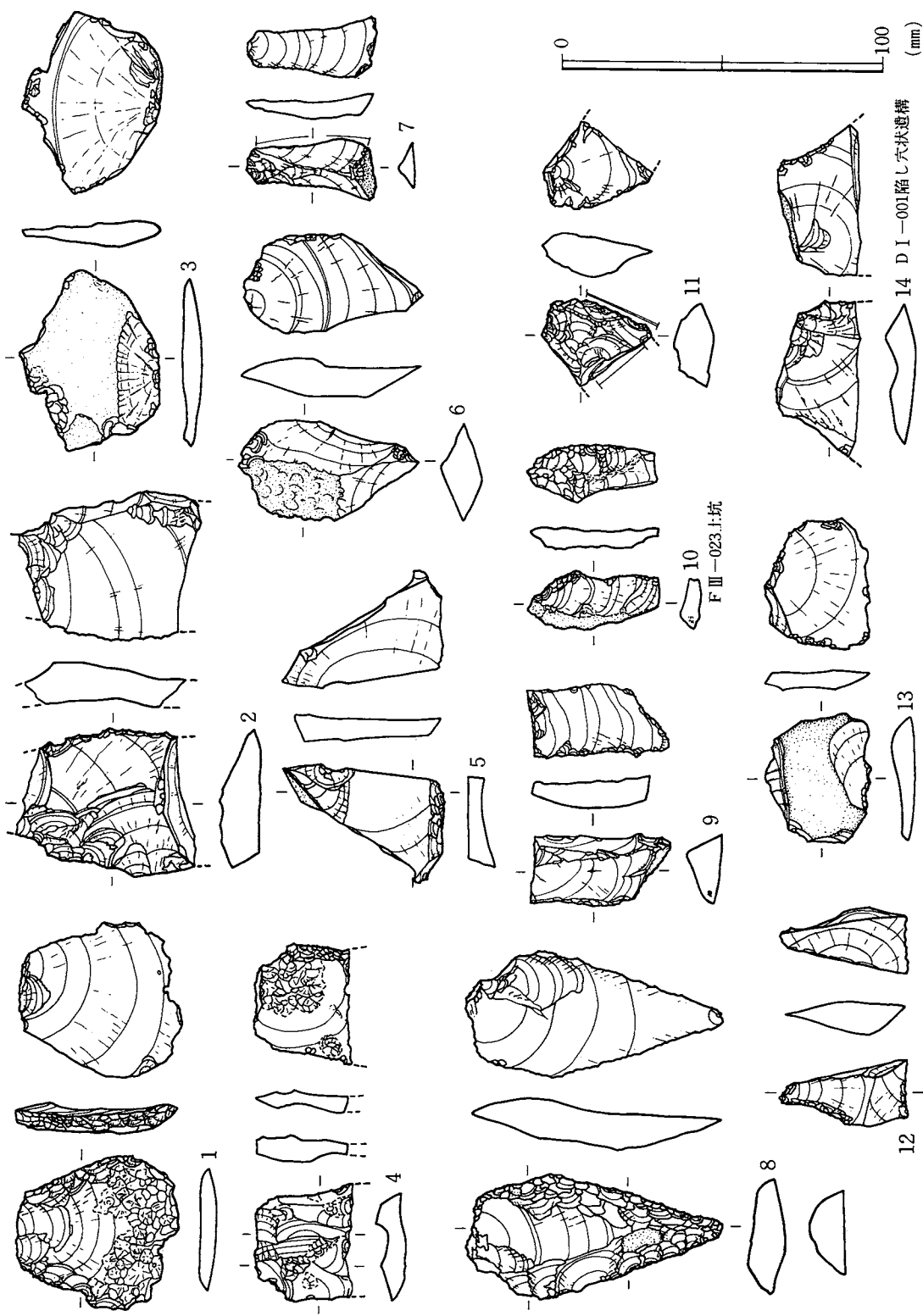
図版19：石器(1)



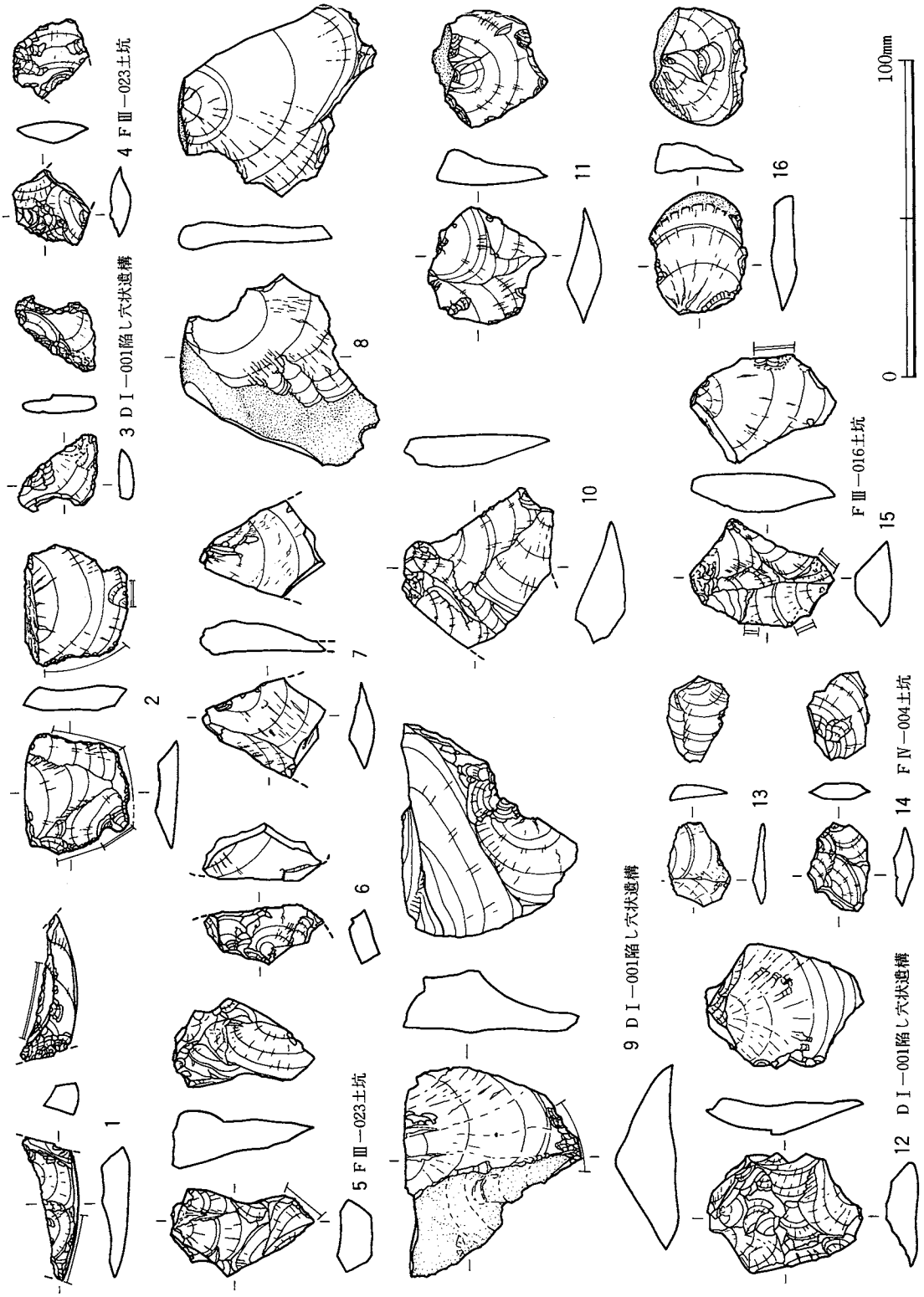
※3と4は、スケールが200mmとなる。

0 100mm

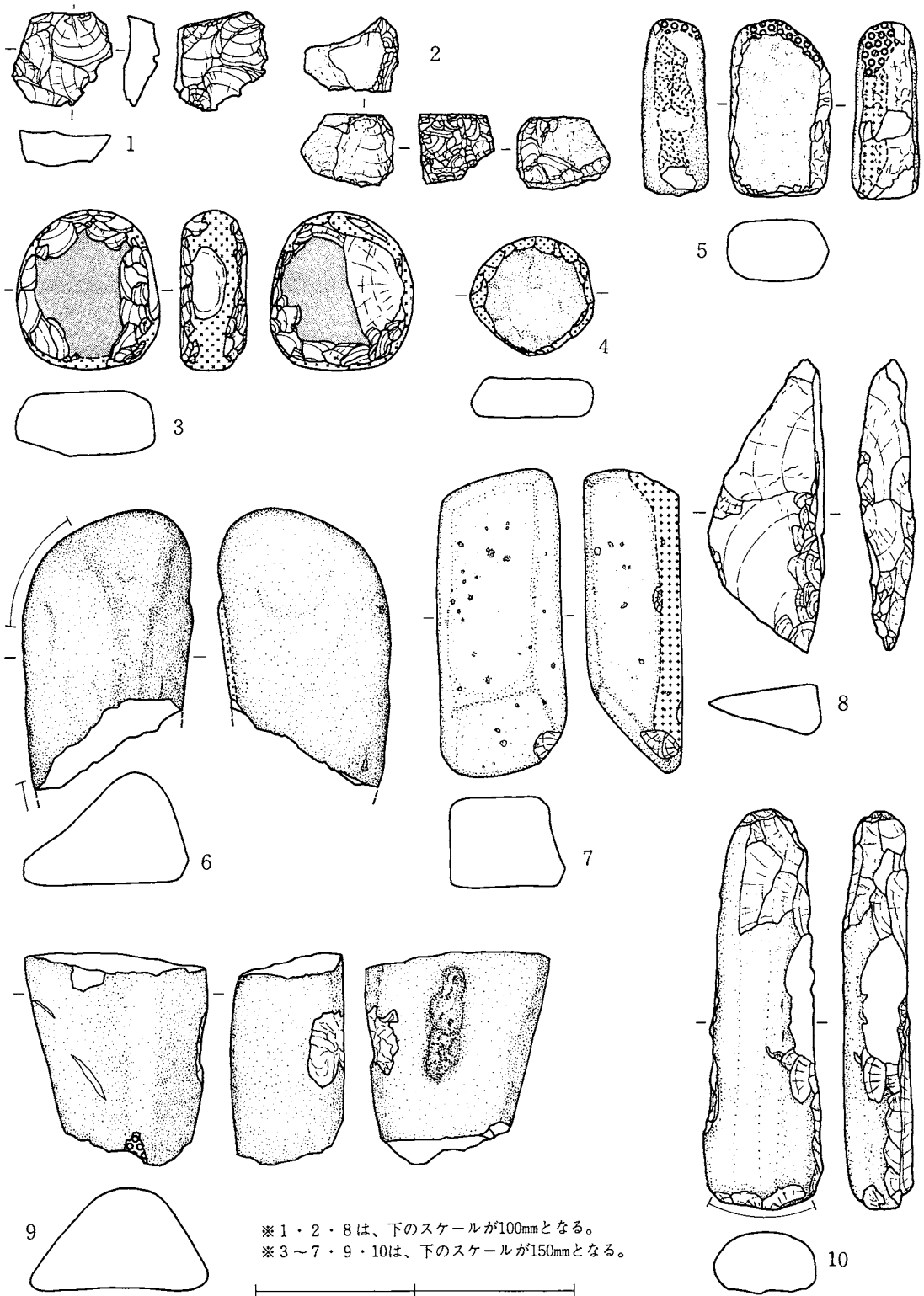
図版 20 : 石器 (2)



図版21：石器(3)

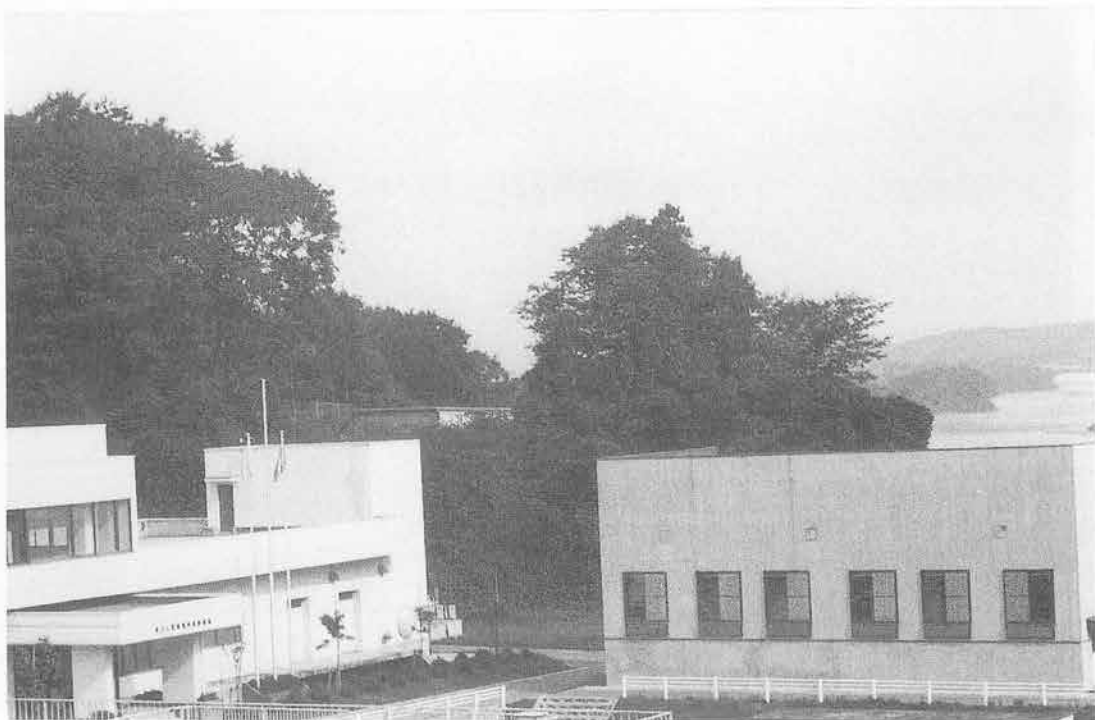


図版 22 : 石器(4)



図版 23：石器 (5)

写 真 图 版



1. 調査前の状態 (取水場区域)



2. 伐採・下刈後の状態 (取水場区域)

写真図版1：調査区域近景(1)



1. D1～E1 区域調査前の状態（導水管管理設区域）



2. B1～C1 区域調査前の状態（導水管管理設区域）

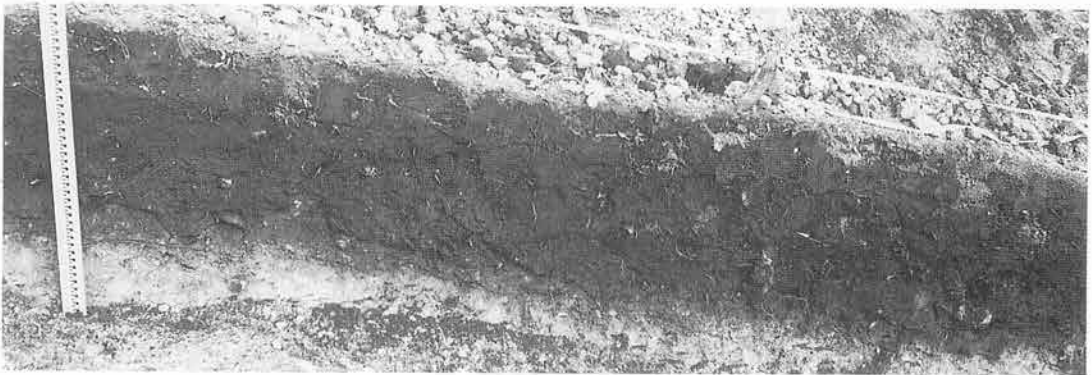
写真図版2：調査区域近景(2)



1. F III 区の堆積状態



2. F IV～G IV区の堆積状態



3. G V区（トレンチ I）の堆積状態

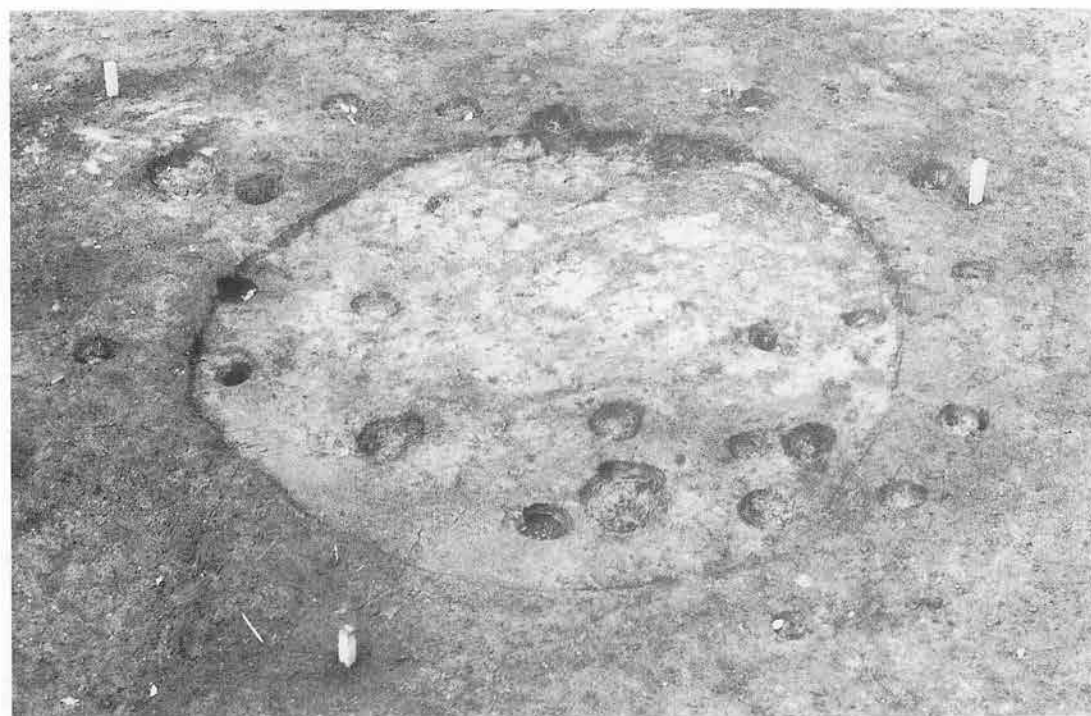
写真図版3：土層堆積の状態



1. 遺構確認状態



2. 土器等の出土状態



3. 遺構完掘状態（貼床土除去）

写真図版4：G IV-01住居址



1. 遺構確認状態



2. 遺構完掘状態

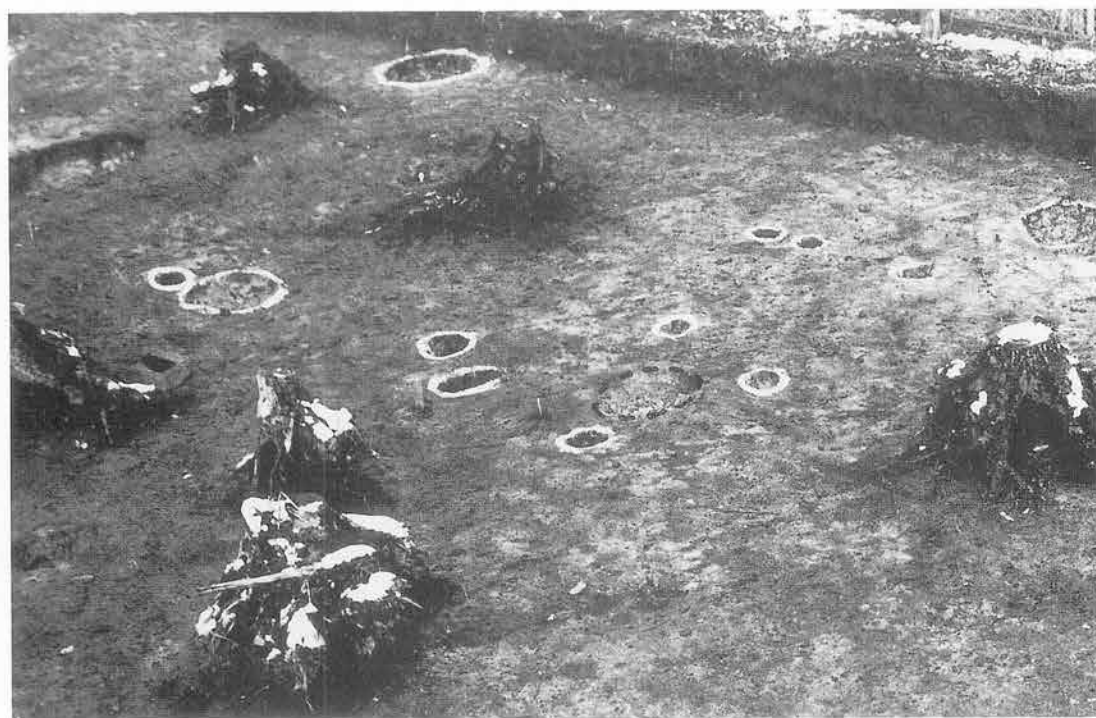
写真图片5：G IV-02住居址



1. 土器埋設炉（焼土除去後）



2. 炉に埋設されていた
土器（約4分の1）



3. 炉周辺の柱穴状小土抗の分布状態

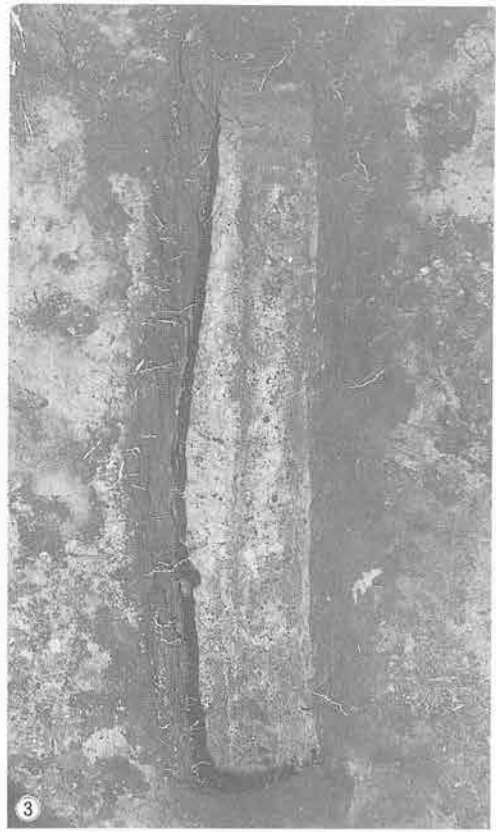
写真図版6：GⅢ区土器埋設炉と周辺状況



- 1. D I-001. D I-002 陥し穴状遺構の確認状態
- 2. B I-001 土抗の確認状態
- 3. F IV区域の土抗確認状態（部分）



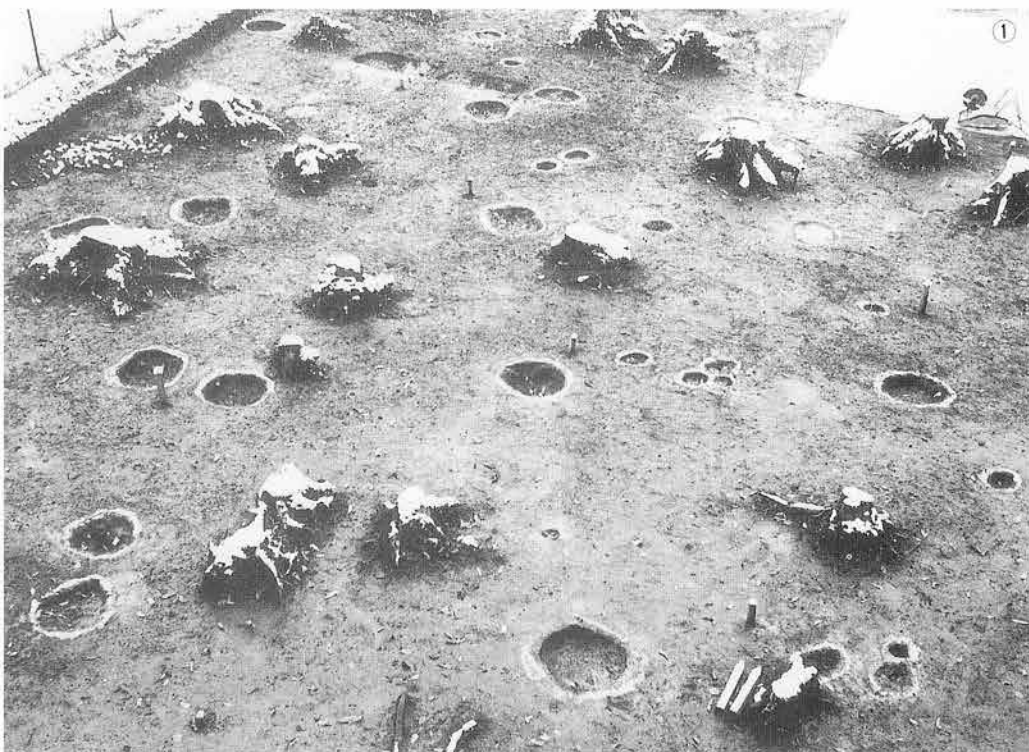
写真図版7：土坑等の確認状態



1. D I-001 陥し穴状遺構全景
2. D I-001 陥し穴状遺構の埋土

3. D III-002 陥し穴状遺構
4. D III-002 陥し穴状遺構埋土

写真図版8：陥し穴状遺構

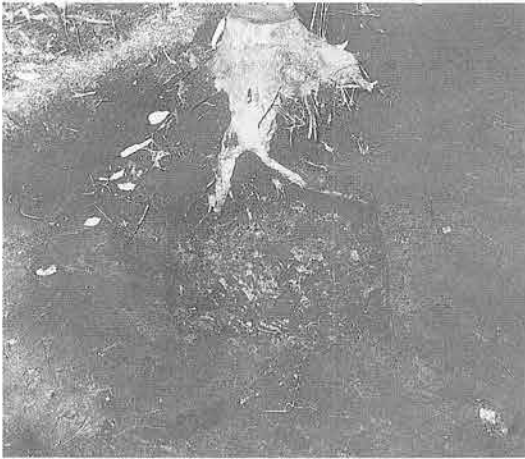


1. FⅢ～GⅢ区域の分布状態

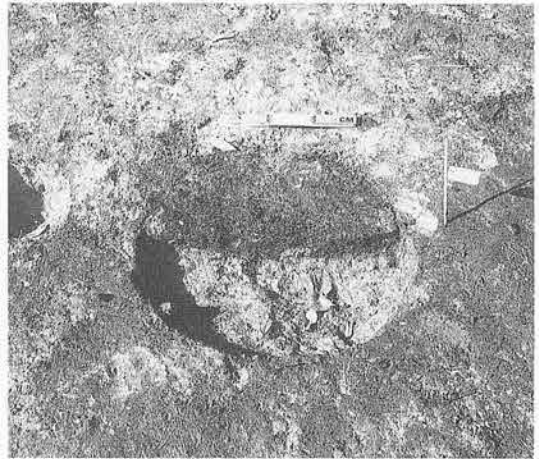


2. FⅣ～FⅢ区域の分布状態

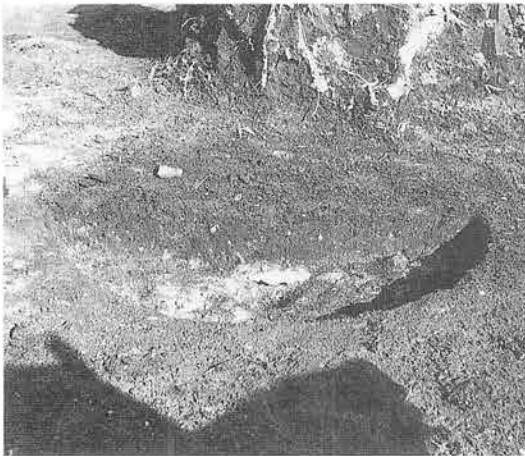
写真図版9：土坑の分布配列状態



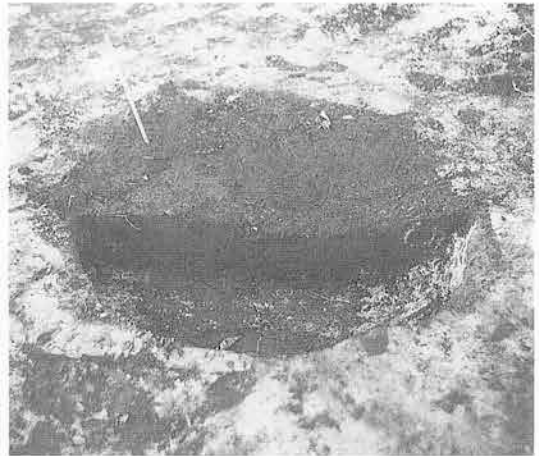
1. B I—001 土坑完掘



2. F IV—003 土坑



3. F IV—009 土坑



4. F IV—016 土坑

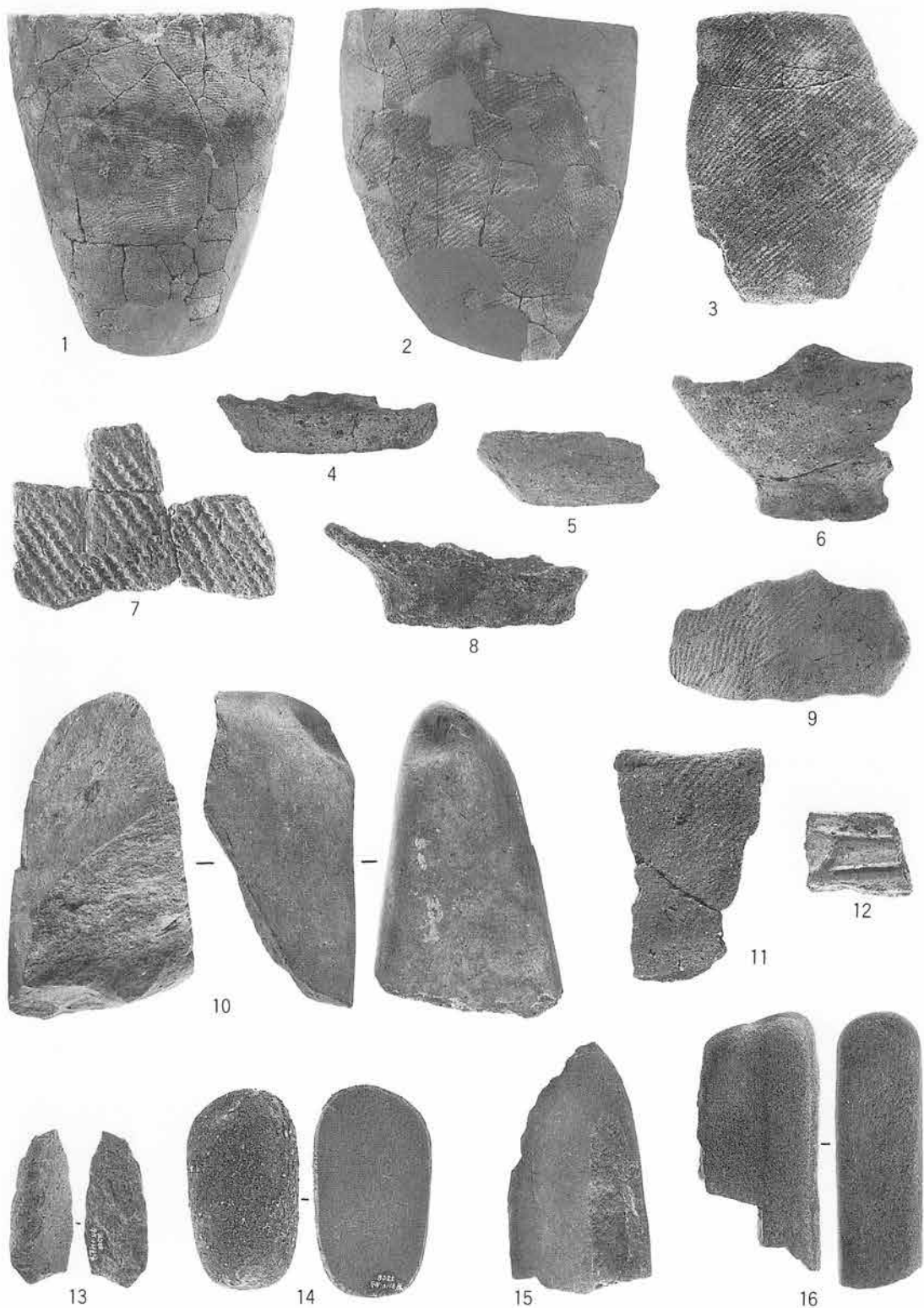


5. F IV—029 土坑

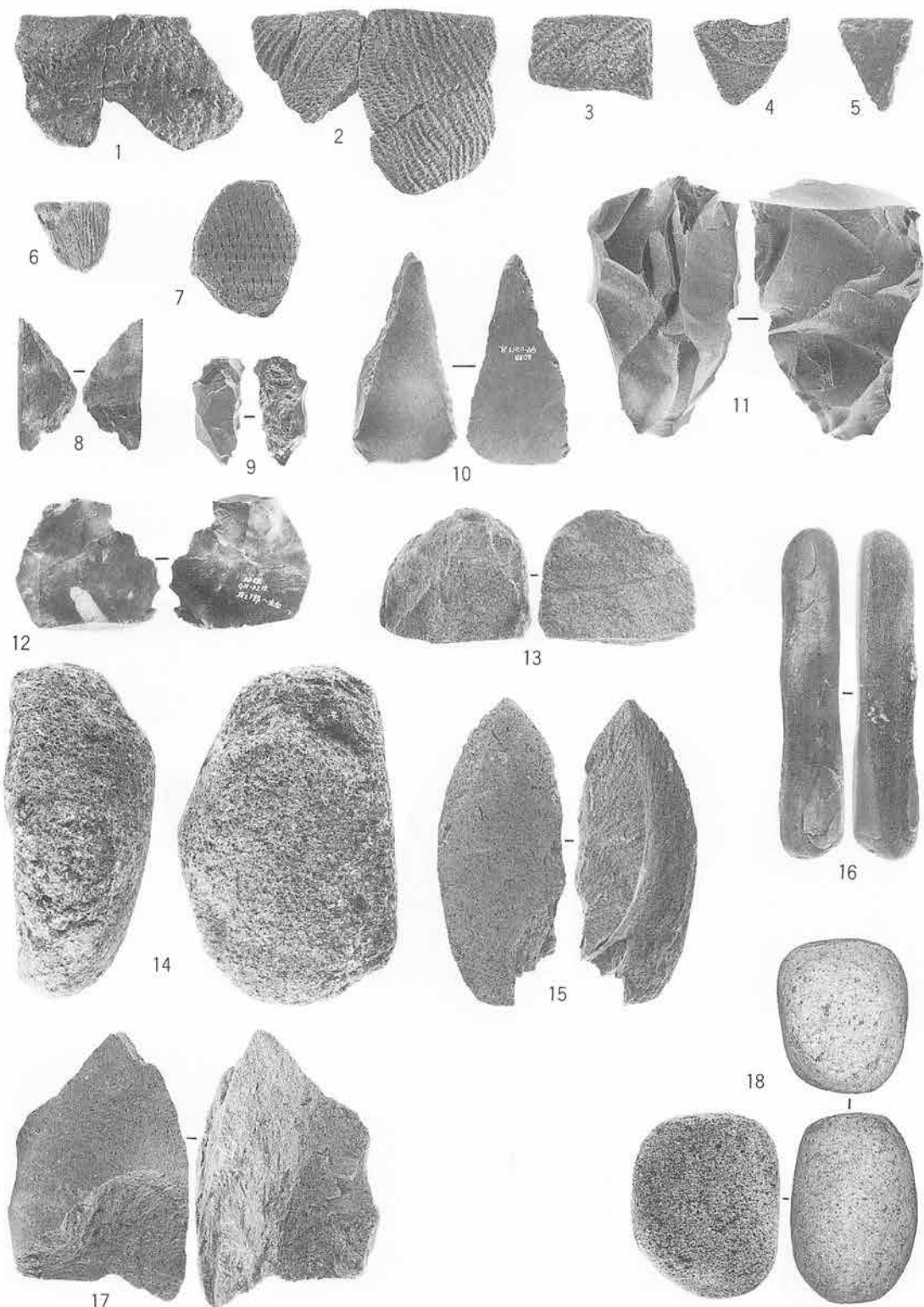


6. G III—006 土坑

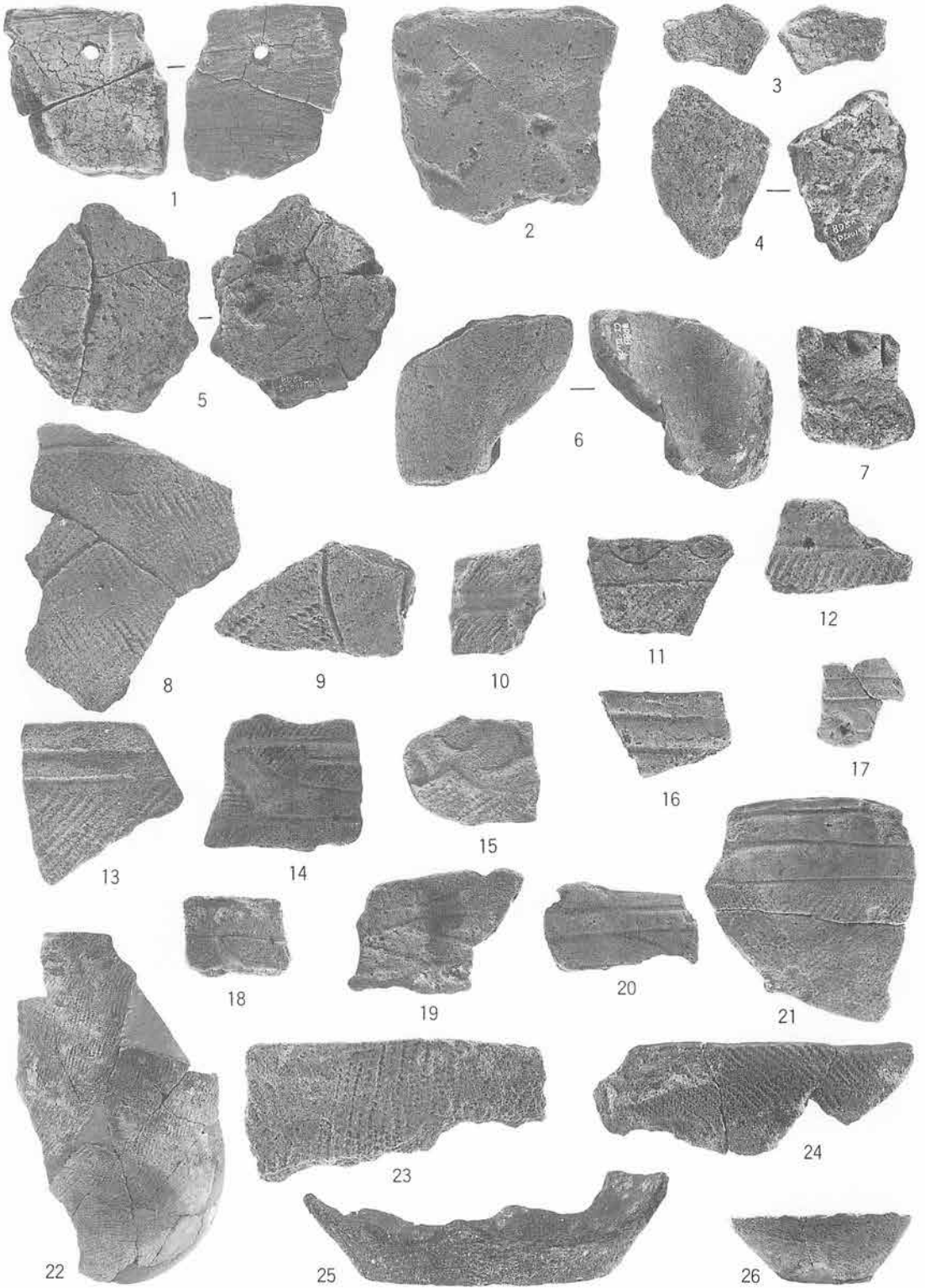
写真図版10：土坑埋土の状態等



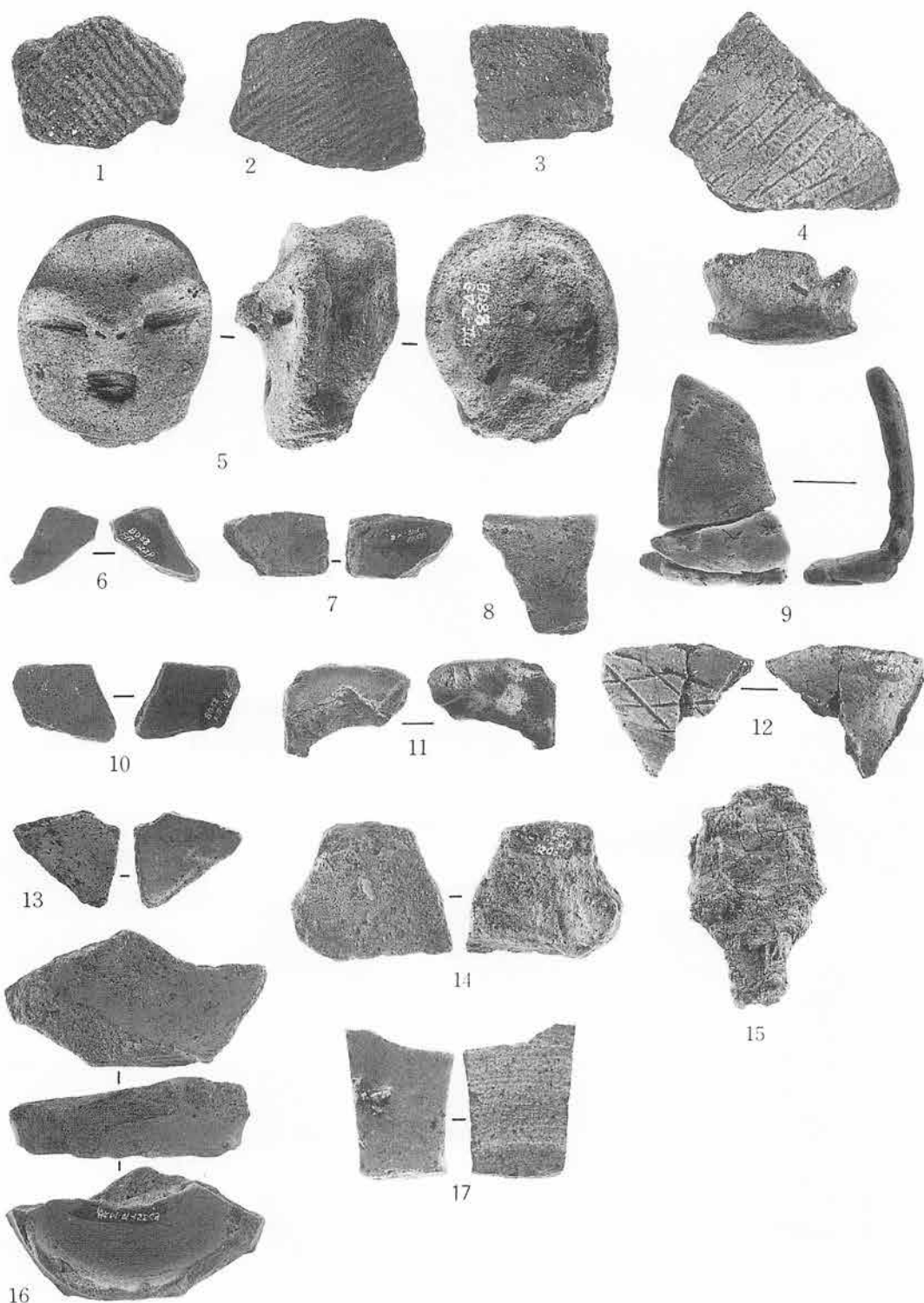
写真図版11：G IV-01住居址出土遺物



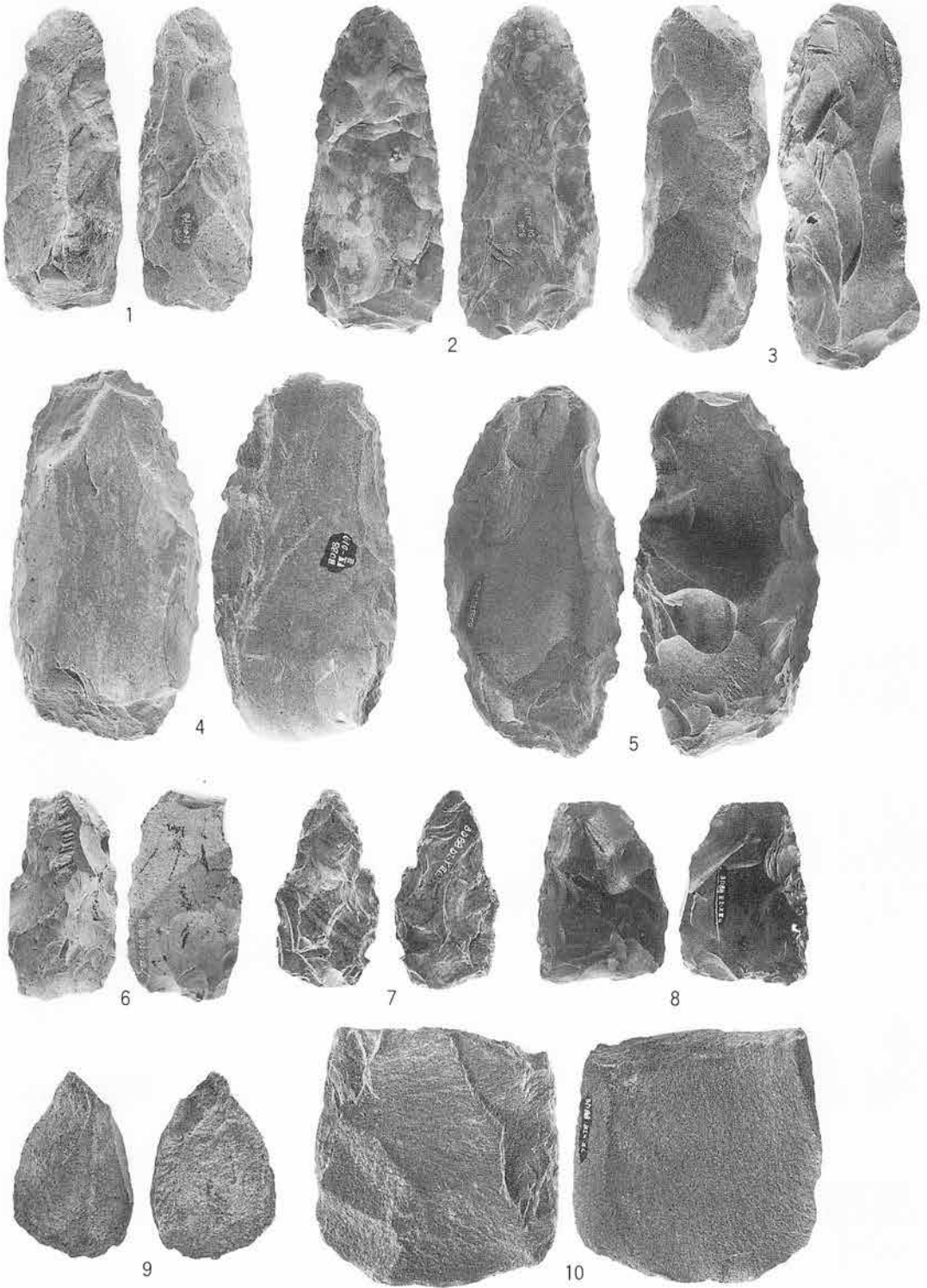
写真図版12 G IV-02住居址出土遺物



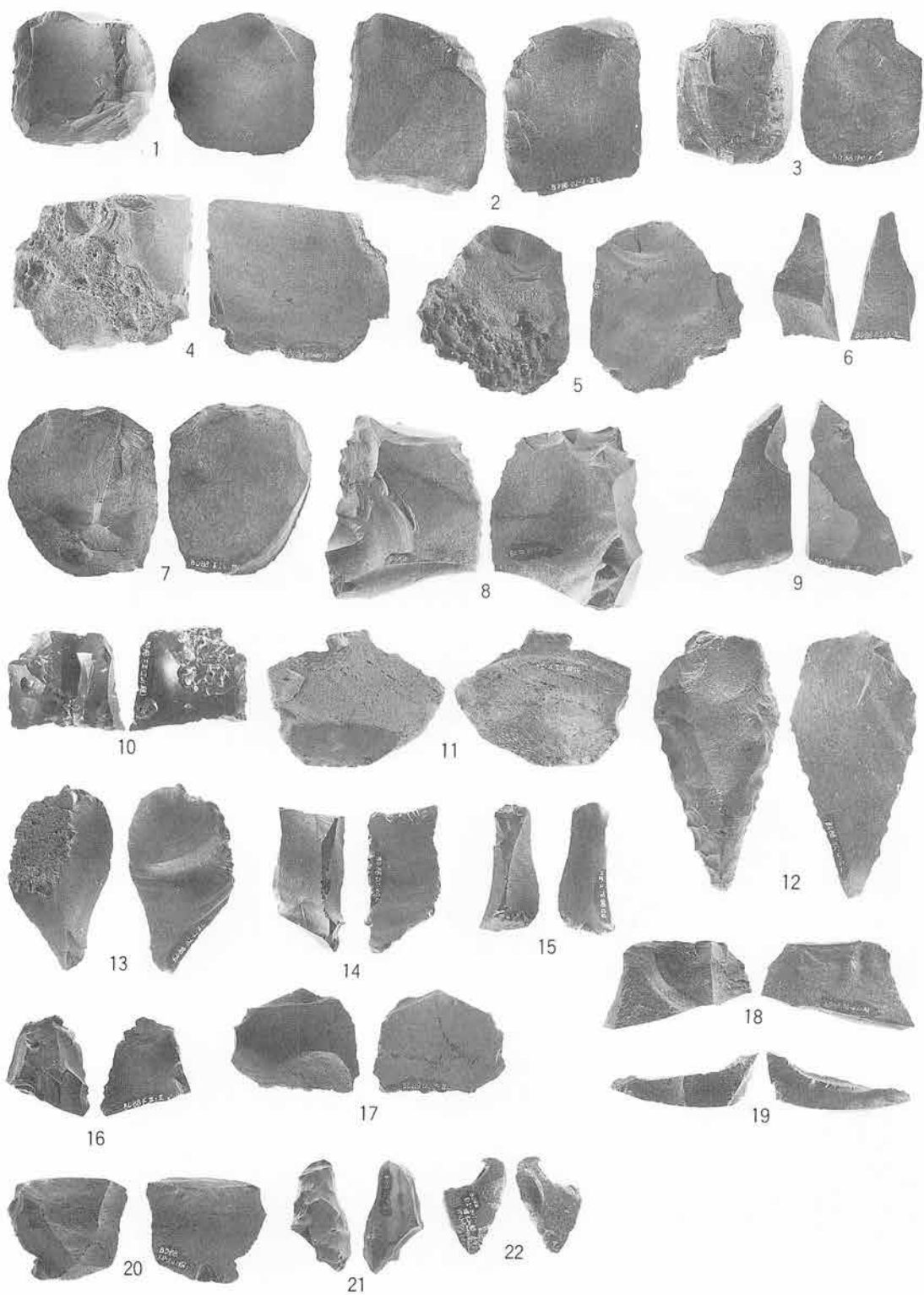
写真図版13：遺構外出土土器(1)



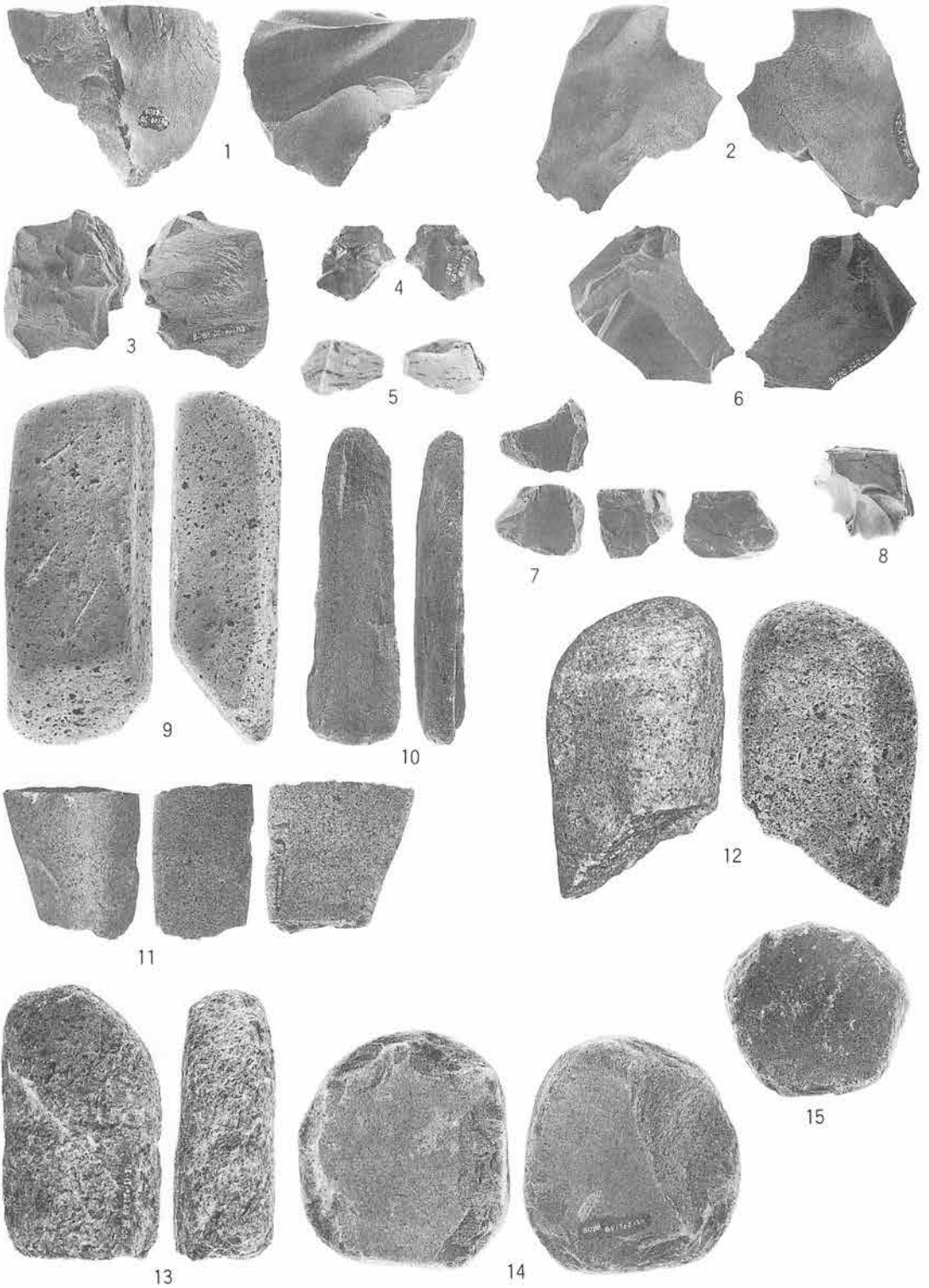
写真図版14：遺構外出土土器(2)他



写真图版15：石器(1)



写真图版16：石器(2)



写真図版17：石器(3)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 及 川 昌 二

副 所 長 鎌 田 良 悦

〔管 理 課〕

管理課長(兼) 鎌 田 良 悦 嘱 託 吉 田 一 男

課 長 補 佐 伊 藤 吉 郎 運 転 技 術 士 佐 藤 春 男

主 事 阿 部 隆 広

〔調 査 課〕

調 査 課 長 昆 野 靖

課 長 補 佐 佐 々 木 嘉 直

主 任 文 化 財 小 田 野 哲 憲 文 化 財 遠 藤 修

專 門 調 査 員 〃 〃 〃 齋 藤 邦 雄

〃 〃 〃 工 藤 利 幸 〃 〃 〃 高 橋 義 介

〃 〃 〃 高 橋 与 右 工 門 〃 〃 〃 佐 々 木 信 一

〃 〃 〃 平 井 進 〃 〃 〃 小 原 眞 一

〃 〃 〃 中 村 良 一 〃 〃 〃 村 上 修

〃 〃 〃 中 川 重 紀 〃 〃 〃 酒 井 宗 孝

文 化 財 藤 村 敏 男 期 限 付 菊 池 達 哉

專 門 調 査 員 〃 〃 〃 〃 相 原 伸 裕

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 及 川 靖 世

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 女 鹿 文 雄

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 濱 田 宏

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 及 川 涉

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 星 雅 之

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 森 下 宏

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 高 橋 堅

〔資 料 課〕

資 料 課 長 高 橋 薫

主 任 文 化 財 田 鎖 寿 夫

專 門 調 査 員

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第145集

坊館跡発掘調査報告書

第三北上中部工業用水道関連遺跡発掘調査

印刷 平成元年10月25日

発行 平成元年10月30日

発行 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡
第11地割字高屋敷185

電話 (0196) 38-9001・9002

印刷 山口北州印刷株式会社

〒020-01 盛岡市青山四丁目10-5

電話 (0196) 41-0585
